

A R I A † Rilanciare  
la Colore †

自分不器用ですから

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この物語は一人の青年が失った「その色」を見つげるための物語。過去を恐れ手に出来ない彼が水の惑星・アクアを訪れ、そこで出会った人、世界の色達、そして摩訶不思議な存在達と触れる事で次第に「その色」と向き合う勇氣と自分の色を思い出していく。

青年と水先案内人の少女達が出会い、やさしい時間が彼に訪れる・・・

# 目次

第一話	その水先案内人との出会いに	1
第2話	その瞬く星々に	12
第3話	その水の妖精達との出会いに	23
第4話	その天上の音色を	36
第5話	そのネオ・ヴェネツィア色の心 は	51
第6話	その春に見つけたものは	69
第7話	その白い妖精つたら	176
EXTRA STORY	その真実の蒼 に	85
第8話	その小さな歌い手に	100
第9話	そのいちばん新しい想い出 に	113
第10話	そのポツコロの日に	127
第11話	その胸躍る時間に	146
EXTRA STORY	その優しき常 緑樹に	160



## 第一話くその水先案内人との出会いにく

色・・・それは世界を現すモノ。

全ての世界に色がある。海は蒼、雲は白、木々は緑、その存在を示すのは色だ。

ならその色が無いとしたら？どうなってしまうのだろうか・・・僕はその色を受け入れられない、だから世界にある本当の色が分からない・・・いや分かりたくない。

それに踏み入ったら僕はまた過去の色を思い出さなくてはならなくなる。

だから僕の世界に「その色」は存在しない・・・見えなくしてしまっただ。

・・・

「・・・なく水の惑星・アクアへ到着いたします。お荷物お忘れの無いよう・・・」

そこで僕の意識は覚醒した。気が付くと眼下には蒼に染まる街・観光都市ネオ・ヴェネツィアが見えてくる。惑星改造によって生まれ変わり水の惑星と呼ばれる、アクア。

僕の名前はカイト・F・コロレ。地球（マンホーム）の美術学校で画家の研修生だ。学校の先生から言われてこの星にやってきたのだが理由は自分の絵を取り戻すため

で  
ある事件以来、僕は描くすべての絵が安全で自分の「色」を出せていない絵ばかりだったために数カ月の研修をここでする事になった。

「確かに風景としては素晴らしいよね・・・でも・・・僕じゃ何を描いても・・・」

いきなり後ろ向きな事を呟いてしまう。それを变えるためにここにやってきたというのに。

「やめよう。こんなんじゃないよ・・・」

ここへ出向く前の日にスケッチブックを新しく買った。前に使っていたスケッチブック

もまだ使えるけど心機一転、もう一度、最初からしてみようと気持ちからでも変えよう

とした・・・なのにまたこんな調子では先が自分で思いやられる。

そうこうしていると空港についた。船から降りて空港に入り、ゲートから街へ出る。

「うわあ・・・これがネオ・ベネツィアなのか。噂には聞いてたけど綺麗な街並みだ」  
一たび空港から降りて街を見るとかつて地球にあった実際の街並みを忠実に再

現し

た建築形式や石畳の色合いなどもどれも地球とは全てが違う光景だった。

そして愛用のエアースケートのブーツを専用につめた靴に装着し、前を見る。

これは空気圧を利用して少し宙に浮いて滑る事が出来る。これで水の上を少しくらいな

ら移動する事も出来るし、遅刻しそうな時にショートカットも出来たりするんだ。

「(こ)なら・・・少し変えられるかもしれないかな・・・。さて行ってみるか」

だが先生がやらかしていた。指定された宿に行ってみると予約が入っていないという。

急いで地球の先生に連絡をいれたのだが返事が「あく！すまん、すまん！」だった。

そうだ・・・そういうえばあの先生は言う事は為になるんだけど性格がいい言い方をすれば豪快、悪く言えば微妙に無頓着なところがあ、何故か憎めない人だった。が・・・

「先生・・・さすがにこれは恨みますよ・・・(泣)」

しかたがなく僕は泊まるための宿を探す事にしたのだが土地勘など無いし、指定された宿以外知るわけもない。いきなり手詰まりになってしまった。

こういう場合は地元の人に聞くのがいいかなと店の人に宿について話を聞いてみた。

「うん。でも今は観光客が一番集まるカーニバルの最中だから宿はいっぱいかもね」

「うつ．．．そんな．．． わかりました、とりあえずこの宿など当たってみます」

ダメ元で宿の住所と道のりを書いて貰い、それを頼りに宿を周ってみる事にした。  
．．．．．それから数時間経って。

「くそお．．．疲れた。これがあるお陰でまだこれで済んだけど歩きじゃ死ぬな」

結局、全部の宿は全滅。どの部屋も満杯で入れなかった。

とうか待てよ．．．これって野宿しろって事か？金銭的なものはあるから食べる事に  
関しては問題はないとしてもこっちは季節的に春前で冷えそうだ。

「本気である先生、今度会ったら天罰決定だ．．．僕もさすがに許さん」

脳内に再生される我が恩師の顔を思い浮かべながら密かに僕はそう誓った。

「ってそんな事してる場合じゃない。宿をどうするかだ、他に何かいい方法は．．．」

ふと気が付いた。僕の隣にいつの間にか女の子が座っている。

「．．．．．」

「君は．．．？」

見た目的にまだ10歳いくかいかないかくらいかな？なんか不思議な瞳をしている。

ただの小さい女の子．．．のはずなのに妙に引き込まれる気がする。

「お兄ちゃん、お絵かきするの？」

「えっ？」



その子が僕の持つている荷物にあるスケッチブックを指差して聞いてくる。そして気が付いたんだけど彼女もスケッチブックとクレヨンを持っていた。

「ああ、だったら一緒にお絵かきするかい？」

「うん、する」

こんな時はとりあえず落ち着いた方がいい。女の子もお絵かきしたいっていうんだか

らちよつと気分転換も必要だよね。

だけど女の子はこつちを向いてじい〜と僕の顔を見てクレヨンで絵を描き始める。

「もしかして僕を描いてるのかな？僕もこの子を描いてみよう」

そして僕も彼女の方を向いてお互いに相手の似顔絵を描くことになった。

「すごく綺麗な肌だな・透明感というか・色あいは・エクルベイジュか」

一番、目についたのはその瞳の色。

「へえ〜、ピジョンブラッドか。珍しい・えつ・ピジョンブラッド・？」

僕は言い知れぬ違和感に襲われる。何故、僕は「その色」を認識したんだ？

なんでそれがピジョンブラッドだと目で認識してる？なんで「その色」が見えてる？

「お兄ちゃん、駄目だよ・・・とつても綺麗な色なんだよ。その色は・・・」

「き・君は・・・」

「思い出して・・・そして・・・染めて・・・世界を・・・わたし達に・・・取戻し・・・て」

何なんだ・・・？この子は何で「その色」の事を知ってる？何を言っているんだ？

「・・・あの」

「っ！」

そのとき、誰かに肩を叩かれて我に返る。すると目の前にいた少女が消えていた。

「・・・・・・・・今のは・・・・・・・・」

「あの大丈夫ですか？顔色がすぐれないようですよですけど？」

「あ・・・ああ、大丈夫です、ご心配をおかけし・・・・・・・・」

振り返った僕の目に見えてきたのはまず陽の光に輝く黄昏の金色（トワイライト・

ゴールド）だった。

「どうかされましたか？さつきからずっと絵を描いていたようですよけど」

そこにいたのはボリウムのある金色の髪を三つ編みに束ね、白をベースにして蒼

でラインや文様が掛かれた服を着ている女性で自分と同じ年くらいな気がする。

「え・・・ええ。さつきまで女の子と絵描きをして・・・帰ってしまったみたいですけど」

とりあえずさつきの事は伏せておこう。言っても信じて貰えるような事じゃない。

だがここで気付いたのはこの人の制服。確かこの街で観光をやっている水先案内人（ウ

ンディーネ）

だったと思い出す、この人なら宿泊施設の情報とかを知っているかもしれない。

「あの実は……」

それから事の顛末と宿についての情報を聞く。一応、回った宿のリストも見せる。

「この宿がダメとなるともうないわね……。カーニバルはしばらくあるからそれを考えるとしばらくは泊まれそうにないと思うわ」

「う・・そんな」

これは本格的に野宿決定な事になりそうだ。しかたがないせめて毛布くらい買おう。などとこれからの事について本格的に考えていたらその女性が話しかけてくる。

「でしたらうちの事務所なんですがカーニバルの期間中だけお泊りになりますか？」

「えっ!? 本当ですか!」

女性の話によると彼女はこの街にある水先案内人の会社の1つ「ARIAカンパニー」

で働いている人のようで今現在は後輩が住んでいる事務所兼住まいだというのだが  
そ

れでも良ければカーニバルが終わり、宿に空きが出るまで泊めてくれるという。

「それだとその後輩の方が困るんじゃない?」

「大丈夫よ、灯里ちゃんなら歓迎してくれると思うわ、うふふ♪」

「なんというか・・・天使がいるならこの人のような女性なんだろうと思う。芸術と  
し

て天使や架空の存在を見た事はあるが現実こんな人がいるのかと思っていた。

「わたしはアリシア・フローレンス。あなたは？」

「僕はカイト・F・コロレといいます。美術学校の1年生です」

「うふふ、よろしくね」

「(ちら)こそ」

握手を交わした僕はアリシアさんのゴンドラに乗せてもらえる事になった。確かこの

人って水の三大妖精って言われるくらい凄い水先案内人だったと思う。

予約もいっぱいでなかなか取れないらしいがこれはある意味でラッキーかな？

「でもその絵、とても綺麗ね」

「綺麗っていつてもまだラフスケッチを修正したくらいですから絵としてはまだ」

「でもあなたの絵は温かさを感じるわ。その女の子もとても穏やかな顔をしてるし」

「温かい・・・ですか？」

そんな風に言われたのは初めてで僕は自分の絵をもう一度、見てみる。

何でだろう自分でも分からない。確かにこの絵は僕が今まで描いてきた絵とは違っ

て

「絵がちゃんと「生きていた」んだ、いつもの僕の絵は「描かれている」と言われてた。何であの子の絵が生きているんだろ・何が違ったんだ、あの時の僕は・？」  
「カイトくん？」

「ああ、すいません。久々にいいのが描けたのかなって思ってた」

「あらあら、うふふ♪」

何故、だかアリシアさんって癒し・だよなあ。人気があるのも分かる気がする。

「ぶいにゅ〜」

「.....」

今気づいたのだがゴンドラに猫・？みたいな生き物が乗っていて頭にはアリシアさんが被っている物と同じ帽子をかぶっているのだが何なんだ、この子は？

「その猫はアリヤ社長っていうのよ。ARIAカンパニーの社長なの」

「しゃ・・社長!?猫がですか!？」

話によれば各水先案内人の会社にはその会社を象徴する猫を社長にする風習がある。その猫の条件は蒼い瞳らしく、確かにアリヤ社長の瞳は透き通る蒼だった。

「ぶい、ぶい、ぶいにゅ〜!ぶい〜」

「えっ?自分の絵を描いてくれ?別に構わないけど。それじゃそこに座ってね」

「あらあら。もしかしてアリア社長の言ってる事が分るの?」

「いえ、何となくジェスチャーとニュアンス的なもので・・・そうかな?と」

自分でもよく分からないんだけどアリア社長がそう言ってると思っただ。

「ぷいにゆ〜!」

どうやら早く描いてくれと言っているらしい。モデルを待たせちゃ駄目だよな?

「わかりました、今描きますからね。アリア社長」

「うふふ、よかつたですね、アリア社長?」

「ぷい、ぷいにゆ〜」

あれだね、アリア社長も和みだね。なんというか、お腹のもちもちポンポン的な意味

で。

「見えてきたわ、あれがARIAカンパニーよ」

それは海の上に建てられた一軒家で白を基調に塗られている綺麗な家だった。

すると中から人が出てきた。アリアさんと同じ制服を着てるから彼女が後輩かな

?

「アリアささくん!おかえりなさい!」

「あらあら、ただいま、灯里ちゃん」

「ぷいにゆ〜!」

ゴンドラが海に伸びる階段の前で止まり、僕が降りようとするとその少女が手を差出す。

「お手をどうぞ。ようこそ、ARRIAカンパニーへ♪」

「あ・・うん、ありがとう」

何というか天真爛漫って言葉が似合う子だなと思う。前髪サイドを伸ばしてそれを結

んだ長い綺麗なエーテル色の髪をしている女の子だった。

「この子がわたしの後輩で水無 灯里ちゃん。こちらは・・・」

そういつてアリシアさんが灯里ちゃんに事情を説明してこれからしばらくお世話にな

る事も説明してくれた。

「はひっ！よろしくお願いします、カイトさん！」

「ああ、よろしく、灯里ちゃん！」

その手を取って僕はARRIAカンパニーに降り立った。

この日から僕の水の惑星・アクアで始まる摩訶不思議で様々な世界の色と出会っていくネオ・ヴェネツィアでのやさしい時間が始まっていくことになるのだった・・・。

## 第2話 その瞬く星々に・・

その夜、アリシアさんと灯里ちゃんとの2人と一緒に夕食をとった。

やはりお世話になるといふのに何もしないといふのも悪いので泊めてもらうお礼に  
今

晩の夕飯を作らせてもらう。こう見えても炊事洗濯は得意分野なんだ。

「はい、簡単だけどピラフとスープ、それとサラダです。ドレッシングは好みで」

ドレッシングもゴマ、梅シソ、中華を作ったけどこれって案外、簡単で美味しいんだ。

「どうぞで」

「いただきます」

考えてみると自分で食べられるレベルなので人に作ったのは案外初めてだったりする。  
る。

とりあえず美味しいと思うんだけど人に食べてもらうのって緊張するんだな。



「・・・お」

灯里ちゃんがつつむきながら何かを言ったのだが聞こえない？まさか不味かった？

「おいしいい〜〜！」

「ぶいにゆ〜〜〜！」

アリア社長と灯里ちゃんが瓜二つなポーズをとりながら美味しいと言ってくれた。

アリシアさんの方も美味しいと言ってくれて3人の食はどうやら進んでくれている

ようで初めてながら僕は自分の料理を美味しいと言って貰えて内心嬉しかった。

「味もそうだけど盛り付けの色合いもとても美味しそうで勿体ないくらいね♪」

「い・・・」応は美術学校生なので色合いとか見た目は気にするんですよ」

それから僕はこのアクアに来た目的や、2人からおすすめの場所などの話を聞く事

が出来てこれからの作業にとっては助かる情報ばかりだな。

「さっきのアリア社長の絵を見せてくれる？」

「あ、はい、どうぞ」

アリア社長が描いてくれとアピールした後に描いた社長のスケッチを2人に見せる。

「うわ〜♪とつても綺麗に描いてくれますよ、アリア社長〜！」

「ぶいにゆ〜〜！」

「あらあら、うふふ♪」

絵を喜んでくれている3人を見ると何だか胸の辺りが変な感じがする。

こう、こそばゆいと言うか・・・なんだろう、随分と久しぶりに感じる気持ちかもしれない。こうやって絵を先生以外に見てもらうのも本当に久々だったかな。

それに僕自身もこの社長の絵はいつもと違ってしていると自覚出来ていた、何故かこの絵と女の子の似顔絵から絵のラインが生きていたんだ。

自分で描いていても前の絵はただ線を引いていただけ、そんなレベルだったんだ。

「(あの子は何だったんだ・・? 何で「あの色」が見えたんだ・・?)」

「カイトさん?」

灯里ちゃんがかいつの間にかすぐ近くにまで顔を近づいて覗き込んでいた。

「ああ・・・めんどくさいと久しぶりなんだ、こういう絵が描けたのって。前までは生きてる絵が全然描けなくてさ、自分でも何で描けたのかよく分からないけどね」  
ただ何となくだけあの子の似顔絵を描いていた時は今までになくゆったりとした心だったような気がする。あの瞳を見て少し取り乱したけどでも確かにあの瞬間の彼女とのスケッチは落ち着いた気持ちで絵に向き合っていたのかもしれない。

「それはあなたが描きたいって思ったからじゃないかしら?」

アリシアさんがふと口を開く。

「僕が・・・描きたい?」

「そう、なんでもやらなくちゃ、やらなくちゃって思つてやるのとやりたい、やりた  
いつて思つてやるのでは全然気持ちが変わつてくるものよ？あなたが今まで自分  
の絵に不満を持つていたのにその絵はとも生き生きとしてる。不思議よね？その  
時、その場に居合わせるあなたの気持ち次第でこんなにも変わつてしまふんだもの」  
思つてもいなかつたことを指摘された。

絵をただ描くのではなく、目的を持つて自分で描きたいと想つた絵だからいいんだ。  
・もつといい絵を描かなきゃ、こんな絵じゃダメだ、そんな事ばかり考えていた。

「そういえば本当にふつとこの子を描こうって肩肘張らずにペンを持たつて」

ああ・僕つて描きたい絵を描いてなかつたから「線の絵」だったのか。色で絵を染  
めてもそれは「色を塗つた絵」、「生きた描写」にはなるはずもないんだ。

「ははっ……ここに降り立つた時、素直に感動出来て、いい絵を描けるかもつて思つ  
てただけど……でも遅いかな。今頃、こんな事を教えられてるようじゃ」

先生どころか絵をやつていないアリシアさんにこんな事を気付かされてるようじゃ  
僕

はもう遅すぎたのかもしれない。

長年染みついたマイナス思考というのは厄介で結局、僕はまた下を向いてしまふ。

「それは……違ふと思ひます」

だが灯里ちゃんが膝に置いた僕の手をとって自分の方を向かせると話を始める。

「確かに遅いスタートなのかもしれないです。だけどカイトさんはまたチャレンジしたいって思ってたんですね？そのためにこのアクアに来たんですね？」

「う・うん」

「だったら何時でも何時でも何度でもチャレンジしたいって思った時がカイトさんにとつての、まっ白なスタートなんです」

まっ白なスタート・・その言葉に僕は感じるものがあつた。

「だからカイトさんが諦めなければ、自分で自分をおしまいにさえしなければきっと本当に遅いなんて事はないんです、わたしは絶対にそう思います」

真っ直ぐに僕の眼を見つめて彼女の想うままの言葉を僕に投げかけてくる。

「だったらカイト君はもうスタートを切ってるわね」

そういったアリシアさんが柔らかい笑みを浮べて僕にスケッチノートを手渡した。「それがあなたのまっ白なスタートライン。もうスタートも切れてるわ、うふふ♪」

「えっ？」

「あなたが自分で描いて、いいと想えた絵なんですもの。だったらまず一步を踏み出せたのだからこれからあなたのまっ白なキャンバスにその眼で見たもの、感じたものを全部綺麗な色で染めていけたらとっても素敵な事だと想わない？」

僕はスケッチブックの少女の絵を見つめる。僕が描いて本当に数年ぶりに納得してよく描けたと思う事が出来た、たった一枚の似顔絵。

まだ色を染めていないラフスケッチだけどこれは僕の大きな一歩なのかもしれない。

「ありがとうございます、何となくですけど少しだけ整理出来た気がします」

「あらあら、どういたしまして。うふふ♪」

「はひっ♪」

「ぶいにゆ〜」

何故だろう、この人達といると自然と笑えている。こんなに笑ったの何年ぶりだろう？それから僕は久しぶりに美味しい夕飯を食べる事が出来たんだ。

「どうぞ〜」

「ありがとう」

その後、アリシアさんは自宅の方に戻り、灯里ちゃんに寢床に通されたのだが・・・。「ええっ?! ベッドつてーっしかないのぉ?!」

「はい、そうですよっ..」

いや、そうですよ? じゃなくて普通まだ知り合って間もない男を何の疑いも迷いもなく自分の寢床と一緒に寝ようとかいうの? いや別に何もしないけどね。

なんだろう・・・この子は少し別の意味で不思議な感じを受けるのは気のせいかな。

「?」

というより邪なのは僕か・・・? 灯里ちゃんは素直に寢床を貸してくれているだけなんだから別に気にする事はないんだ、僕が考えすぎているだけだ。

「とりあえずお邪魔します」

「どうぞ〜」

そうして布団に入ったのだが何だろ? なんかほんのり温かくていい匂いがする。

「今日は天気が良かったので外でお布団を干したんです。お日様の良い匂いですよね」

「お日様の匂いか・・・うん・・・悪くないかも」

このアクアだと当たり前の事なのかもしれないけど地球育ちの僕からするとこんな事

でも妙に感動してしまう。なんか僕も子供っぽいな、まだ・・・(苦笑)

「それに見てください、上」

「?」

灯里ちゃんが指差す方向を見上げる。そこには天窓があつてその先を見つめる。

「・・・あぁ・・・」

そこに広がっていたのは満点の星空。とても澄み切った空には1つ1つ微妙に色合

い

が異なる星々が鏤められ、そして月が太陽とは違う、静かな光で部屋を照らしている。街から離れた場所にあるこの場所は余計な光もない。

だから余計に月の光の静かな色と夜空に瞬いている星々の色を引き立たせていた。

「凄い……。こんな風景・映像でしか見た事なかった。ここは手が届きそうだ」

「わたしも地球育ちなので最初来た時はとつても驚きました。今でもここから見える夜空はとつても素敵でここはわたしの特等席なんですよ♪」

「ははっ……。いいの？ その特等席に僕を連れてきちゃって」

「はひっ。カイトさんにも見てもらいたいと思いましたが。この空はとても綺麗な

星を描いた素敵なお話聞いたらそう思ってた♪」

何だろう……。何故か、その時、僕は自然とこんなセリフを吐いていた。

「恥ずかしい台詞禁止！」

「ええ〜」

「でも夜空のキャンバスか……。うん……。確かに綺麗で素敵だよ、自然の風景画だ」

そういうと灯里ちゃんが起き上がって僕を見ながらこう言った。

「カイトさんは自分をそんなに悲観的に見る事ないですよ、だって」

「？」

僕は灯里ちゃんの方を向いた。だけど僕は息を呑んだんだ・・眼に映った「絵」に。「素敵な人の眼には、世界は素敵に映ってくれるんですよ・だからこの空を素敵と

思えたカイトさんもとっても素敵な人なんです、自信を持つてください」

天窓から指す月の光、そして側面の窓から見える星空を描いた夜空のキャンバス。そしてそれを背景に座り笑みを浮べる灯里ちゃんが自分の視界に入った瞬間にそれが一枚の「絵」になっていた。

その一瞬が僕の眼には鮮烈に焼き付いて僕の中に突発的な感情が生まれたんだ。

「ご・ごめん、灯里ちゃん。ちょっとそのままにしてー!」

「は・はひっ?」

寝床に置いていたスケッチブックとデッサン用の鉛筆を持つて床に座り、その構図をすぐに頭と目に焼き付ける。その一瞬を見逃したら描くことが出来ないんだ。

「ごめん、ちょっとの間、じっとしててくれる。この絵を描きたいんだ、どうしても」

「・・・はい、わかりました」

そういつて微笑んで承諾してくれた灯里ちゃんに笑い返して僕はデッサンに集中する。

「(星は際立たせながら目立たせ過ぎず・・灯里ちゃんは柔らかいタッチで・・月の光の淡さは・・これか・・?いや、描くならこの方がいい)」



それから黙々と描き続けた僕が気付いた時には1時間が経っていた。

その間、灯里ちゃんは何も言わずに微笑んでずっと描き終わるのを待つてくれた。

「で・・・出来た・・・」

描き終えた僕は大きく一息を吐く。

すると灯里ちゃんとアリア社長も僕の両隣に並んで描き終えた僕の絵を見る。

「わあ~~~~・・・♪」

「ぶいにゆ~~~~・・・♪」

そのスケッチブックには眼に焼き付けた月光に照らされる灯里ちゃんと夜空のキャンバスを描いた、ただ無心で描きとめた現実で見た「絵」がそこにあった。

初めてだった。こんなに衝動的な行動を取ったのは。

さつきのアリアさんの言葉があったかもしれない。「自分の描きたい」という気持ちに気付かされたからこそ見えなかった一瞬に気付けたのかもしれない。

「ありがとう、灯里ちゃん！灯里ちゃんのおかげだよー！」

「わひっ!?あわわっ・・・カイトさん」

「へ？」

嬉しさのあまり彼女に抱き着いて・・何やってんだ、僕はああああ!?

「ごーごめん!?あの、これは故意はなく!あの、嬉しさのあまりというか!」

「だ、大丈夫ですよ!気にしてませんから!嬉しいと喜びたくなりますもんね」

そういつて灯里ちゃん顔が顔を赤くしている。

ああ・・・僕はなんて事を。あつて間もない女の子に抱き着くつて。嬉しいから

つてもう少し考えるべきだったよ、それからお互いに気まずい雰囲気になつてしま  
う。

「と・・とりあえず」

そういつてスケッチブックを胸に抱えながらあの微笑みを浮かべて言った。

「また増えましたね、まっ白なあなたのページに。素敵な世界が」

「・・・うん、そうだね」

それから僕と灯里ちゃん、そしてアリア社長でその絵をずっと見つめていた。

このアクアに訪れて僕は変われるかもしれない。

まだ「あの色」を見る事は出来ないけれど・・・でも一瞬を見る事が出来るようになった。気付けなかつた世界の瞬間美、灯里ちゃんとアリアさんに教えてもらつた「描きたい」と想う気持ち、止まっていた僕の大きな一歩だった。

こうしてアクアでの最初の夜、僕にとって忘れられない1日は過ぎていった。

### 第3話 その水の妖精達との出会いに・

「……むむうく……」

その日、水先案内会社の大手老舗【姫屋】の跡取り娘の藍華・S・グランチエスタは朝からある人物達を尾行していた。

何故か？彼女にとってはかなりの大事件だったらしく、朝からずっとこの調子だ。

「藍華先輩、一体、何をしているんですか？」

そしてその裏から彼女の後輩で水先案内会社の新鋭【オレンジプラネット】に所属し若き天才としてその卓越した操縦技術を注目されているアリス・キャロルだった。

「後輩ちゃん？ちよつと大事件なのよ」

「大事件？こんな日に日差しの温かい陽気な日に事件なんてでつかいありません」

「こういうアリスをその原因を向かせて指差す。

「はっ！……これは……！」

「だから言ったでしょ、大事件よ、大事件！」

「なくにをやつとるんだ、お前達は？」

「わひやう!?!・ひっ?!」

いきなりその裏から顔を乗り出してきたのは藍華の先輩であり【姫屋】のエースと呼ばれている【深紅の薔薇】の異名を持つ晃・E・フェラーリである。

さらにその後ろには何があるのか気になって首を伸ばしているのだがただ単に立ち上

がればいいだけという簡単な考えにいたっていない、アリスの先輩でありオレンジブラネットのエースで【天上の謳声】と呼ばれるアテナ・グロリーイである。

「休みでカーニバルにでも誘ってやろうと来たのに練習もせずにかくれんぼか?」

「ち・・違いますよ。あの、実は朝から大事件でそれを追跡してたところで」

「大事件? 一体、何だと・・・。はっ?」

「あれ? あれってアリシアちゃん?」

そう、藍華が朝から追っていたのはアリシアだ。

そしてその原因というのは朝のカーニバルが始まる時間から待ち合わせて一緒に廻つて楽しそうに話している隣の青年についてでこれには幼馴染の晃や親友のアテナも

驚

いた声を上げて4人そろって看板の後ろに隠れて様子を窺う。

「ま・・まさかあの男、アリシアの彼氏かなんかか!? かなり仲が良さそうだよ」

長年彼女の幼馴染をしている晃だがアリシアに色恋沙汰があるなど予想もしていない  
か

ったようでかなり動揺しているがアテナはどちらとも取れない微妙な反応。

「アリシアちゃん、付き合ってる人いたのね・・でも少し違う気も・・うん?」

「あつ! 向こうにいけますよ!」

「こうなれば真相を説明してやる、お前ら、わたしに続け!」

いつもの鬼教官キャラはどこへやら完全に野次馬化した晃を先頭に2人を追った。

【カイト視点】

「やっぱり賑やかだね、アリシアさ・・むぐつ?」

僕が名前を呼ぼうとするとアリシアさんに口を指でついて塞がれた。

「もう、また間違えてるわよ? 同い年なんだから【さん】呼びじゃなくて、ね?」

「いや、ね? って言われても・・・」

今日はカーニバルの最終日。ここに来て3日目なのだが今日はアリシアさんが休み  
と

いう事でカーニバルを案内してくれる事になったので一緒にやってきたんだ。温かい日差しに気持ちのいいそよ風が吹く。季節的には寒いのだろうが日差しの温か

さのお陰で風も心地よく、今日はとても過ごしやすい日になった。

だけど昨日の夜から僕はかなり困ってしまったんだよね。

というのも僕は年上だと思っていたアリシアさんは僕と同じ19歳で同い年だった。断然、僕なんかより大人っぽいし、落ち着いて会社を切り盛りしていたから驚いた。それで同い年で「さん」呼びは他人行儀だから呼び捨てでいいと彼女から提案があったのだがいきなり言われても困るし揚句には「アリシアちゃんでもいいわよ、うふふ♪」と言われたがそれこそアウト、無理に決まってるじゃないか!?

「にしたってまだ会って3日目の人間に呼び捨てで呼ばせますか？普通」

「わたしはあなたが信頼できる人って思うからそういうのよ。それにあなたの研修

期間中だけとはいえ、これから一緒なんだから家族みたいなものだわ、うふふ♪」

そう、お世話になってから炊事でももちろん朝・昼・晩、洗濯に会社の掃除など住居と自分にとってのきつかけをくれた彼女達にせめてものお礼のつもりでやっていたら気に入られてしまい、いつそこを拠点にいいと言われたのだ。

これから新しい宿にいけるかわからないし、お言葉に甘えたわけなんだよね。

「はあ・・・、わかった、わかりましたよ。言えばいいんでしょ、云えば・・・!」

最近、思った事がある。何気にアリシアさ・・・アリシアは頑固な一面がある。

「んでアリシア。さつきから受けるこの視線は何なんですか・・・?」

すれ違う人、すれ違う人に見られるのだが最初は有名なアリシアを見ているんだと思つていたけれど視線には僕を見る目もあつて何で、僕?と疑問に思つていた。

「そういう丁寧口調も。よ?」

それですか・・・?

「・・・何なんだ、アリシア・・・?」

「あらあら、女性陣のほとんどはあなたの事を見るみたいよ?とても魅力的なもの  
僕が魅力的・・・?それはまた新たな論説を作ったものだと思う。

今まで学校で女子とは交流が無かつたわけじゃないけどそんなにモテた記憶もない  
し

僕をモテているというアリシアの意見は勘違いじゃないのかと僕は思つていた。

「僕より顔がいい人なんていくらでもいるんだし、それは考えすぎだと思ふよ?」

「あらあら。わたしはカイトの事をとて魅力的な男性つて思うわよ?」

「なっ!?!」

アリシアにそういわれた僕は顔が真っ赤になった。いや、自分でも分かるくらいだし

ね。

「うふふ、そういう可愛いところがとても魅力的よ♪」

「・・・これはあれか・・・？見事に遊ばれたって事か・・・？」

「やってくれたな、アリシア・・・」

「あらあら、うふふ♪」

なんとというんだろうか、アリシアって何気に小悪魔キャラか？

このスマイルに騙されているのかもしれない、いや、よく言えばお茶目なのかな。

「そうだわ、このカーニバルではこの仮面よね？これはバウータっていう屋台なのよ」「バウータ？」

形や色もさまざまなお面が所狭しと飾られている露店があつてアリシアの話によるとカーニバルはバウータと呼ばれるお面とカツパロというマントがお決まりらしい。

「仮面か・・・前に美術観点から古の仮面を題材にしたデッサンをした事があつたけ

ど古来は宗教的な意味合いが強かったみたいだね。仮面の象る神・精霊・動物に

人格が変化するなんて言われて別々の自分に憧れを抱いた人の思念を具現化した

モノだつて先生は言つてたな」

なんとなくだがこのカーニバルは1年の初めに行われる。仮面を被るのは今まであつた悪い事、悪い自分を忘れて仮面をつける事で別の自分を象ろうとしているのが



最初なんじやと思う。こんな日くらいはいい未来の自分でありたいだろうしね。

「カイトもそう思う事はあるのかしら?」

「うん・・・どうだろうね(苦笑)」

実際に言えばそう思う事はあるよ。

僕にも夢はある。だけどその夢を叶えるためにはどうしても「あの色」と向き合わなければならぬ。でもまだ僕にはその勇氣は足りないように思える。

絵を描くための基本理念を思い出せただけでも今は大きな一歩だったんだ。

「だけど仮面のデザインが特殊すぎて僕でも笑けてくるな」

よくよく見てみるとどれもこれも面白いデザインで別の知識として勉強になるね。

「こんなの面白いんじゃないかな」

そういつてアリスシアに仮面を被って見せるのだが彼女が可笑しそうに笑い出す。

「それ被る方が逆よ、カイト? (笑)」

「えっ」

自分の紫の部分が首かけを模していると思っていたのだがカチューシャ的に頭につけるものを模していたようなのだがどっちとも取れるぞ、この仮面・・?

アリスシアは口を押えて可笑しそうに笑いを堪えている。

「ちよつと笑い過ぎじゃない? アリスシア」

「ごめんなさい・・・やっぱり可愛いと思っちゃって・・・うふふ・・・♪」

「同じ年といいつつ年下の悪戯対象のように思っただけですか、アリシア「さん」？」

【追跡メンバー視点】

「な・・・なんだ、あんなに仲良さそうに！アリシアが男と楽しそうにカーニバルなんて今までの幼馴染の10年以上の中でも見た事ないぞ、てか誰だ、あの男は？」

「見た事ない方ですけどカッコいいですね。他の人も振り返ってましたし」

先ほどからつけている兎達も驚いていた。

もちろんアリシアの人気は知っている。男性ファンが多い事なども認知されている  
レ

ベルなのだが特定の男性とあややして楽しそうにしているのは見た事がなかった。

「ま、まさか！アリシアさん、密かに恋人作ってたってわけ!？」

「いえ、あそこまでするとすでに隠してませんよ、藍華先輩」

いや、そこは冷静にツツコミをすることでところじゃないと藍華がジト目でいらんだ。

「でもアリシアちゃんがプライベートで男の子と一緒になのって初めて見たかも」

アテナも彼女との付き合いは長いのだが記憶になかった。

「皆さん、何してるんですか？」

「「「わあっ?!」」」

いきなり裏から声をかけられて驚いた4人は隠れていた看板ごと雪崩式に倒れた。

【カイト視点】

「ん？」

何やら物音がして裏を振り返るとそこには灯里ちゃんが立っていてその前に何故か人がドミノ式で倒れている。

服装を見る感じだと彼女達ももしかして水先案内人？灯里ちゃんが親しそうに話しかけてるから知り合いかなんかかもしれないけど何故、あんな状況に？

「あつ、カイトさん〜！アリスアさ〜ん！」

「ぶいにゆ〜〜！」

そういつてアリア社長がこっちに走って来て僕に飛びついてくる。

「おっと。アリア社長、やっぱり少しダイエツトした方がいいですよ？ちよつとお腹がもちもちし過ぎです、まあ、さわり心地はいいんですけど」

「ぶいにゆ〜〜！」

どうやら気にしているところを指摘されてへこんでるみたいだ。自覚あるのね・・・

・・・それから数分後。

「なんだ、ただの案内かよ。てつきりアリスアの彼氏かと思つたじゃねえか！」

「あらあら〜、彼氏だなんて照れちゃうわね、カイト？うふふ♪」

いや、そんな風に言われても。てか何で僕まで顔が赤くなる、バカか、まったく。

「えくと初めまして、カイト・F・コローレといいます。よろしく」

そういつて黒髪の綺麗な女性に手を差出す。考えてみればまだ挨拶をしていなかった。

「あ・・・ああ、わたしは晃・E・フェラーリ、姫屋の一人前水先案内人だ」

次に紫丁香花（ライラック）色の髪が特徴的なアリシアの親友という女性に手を差出す。

「わたしはアテナ・グローリイ。オレンジプラネットの一人前水先案内人よ」

そして隣にいる緑翠玉（エメラルドグリーン）の長髪が特徴的で小柄な女の子。

「はじめまして、アリス・キャロルです。半人前水先案内人をしてます」

次に青玉色（サファイアブルー）の髪を左右で三つ編みにしている晃さんと同じ制服の女の子だ。

「藍華・S・グランチェスタよ。えくと追跡しちゃってごめんなさい」

どうやら彼女が一番最初に僕とアリシアの事をつけていたらしく便乗で晃達まで一緒に追っていたらしいけどどうすれば恋人同士に見えるんだろ・・・？

とりあえず全員と握手を交わして自己紹介を終えるのだけれどそれを見ていた灯里ちゃんが何かとても嬉しそうな、というよりこの顔って素敵なモノ見つけた時のか？

まだ3日目なだけで彼女については確定している事がある。

灯里ちゃんは何か素敵なモノを見つけたり、感じたりするとこの顔になるんだ。

「どうしたの、灯里ちゃん？」

「いいえ、なんだか出会いの瞬間を見れるのって素敵だな、って思っ」

何かうつとりするようなとても物思いにふけるような表情で言葉を続ける。

『はじめまして』と言う時ってきゅんってなりますよね」

「そ・そう？」

「はい、人と人が出会うのは素敵な奇跡。だからその瞬間を宝物にしてとってお

きたくなつちやうんですよ。そこから始まる大切な時間を想うと」

やっぱりあれだね、どうしてもあの言葉を言いたくなるんだ。素敵な言葉なんだよ？

「恥ずかしい台詞禁止！」

「・・・・・・・・」

誰かと言ったツツコミが被って視線を向けるとそれは藍華ちゃんで同じポーズだった。

「ええ・・・・・・・・」

「あれだよね？なんだか・・無性に言いたくなるよね、藍華ちゃん？」

これは僕だけの衝動ではないはずと藍華ちゃんに同意を求めてみる。

「奇遇ね、わたしもあなたと同じ衝動にいつもかられるのよ。この天然素敵娘には」  
「ええく・・・」

そんなこんなでアリシアとのカーニバルめぐりから始まり、今日は一気に知り合いが増えてしまった。こんな簡単に人との出会いってあるものかなと思う。

ここに来た時なんて知っている人もいないし、どうやって日々を過ごしていくのか不安だらけだったんだけどまさかこんなに触れ合える人達に出会えるなんて。

「でもあれかな」

「「「「「「？」」」」」」

僕もなんでそんな柄にもない事を口走ったのかはわからないけど言ってしまったんだ。

「そんな素敵な出会いを当たり前のように入れてくれるのがこのネオ・ヴェネツィア

なのかもしれないなって。現にこうやってアリシアや灯里ちゃん達と驚くくらいに簡単に出会えたし・・・その出会いが晃さん達との出会いも生んだし、普通ならこんな簡単に人と触れ合う事って難しい気が、・・・ってどうしたの、皆？」

何故か、アリシアと灯里ちゃん、アテナさん以外が僕の方を呆れたような目で見てい

る。  
「え？え？？」

「「恥ずかしい台詞禁止!」」

「ええええええ!?!」

うう・・僕まで灯里ちゃんの影響を受けてしまったのかな。何を口走ってるんだろう。

「あらあら♪やっぱりカイトは魅力的みたいね、うふふ♪」

アリシアがそう笑うのを溜息交じりに見つめながら誤魔化す様に空を見上げる。

「(でも・・まあ・・いいか。なんか悪くない、こんな自分つてのも)」

少しだけ自分の心の変化に心地よさを感じた。

それもこの星に住む彼女達、水の妖精達のなせる業・・変に詩人過ぎたかな？

頬を撫でるそよ風と温かな日差しを感じて穏やかに時間は過ぎていった・・・。

## 第4話 その天上の音色を・・・

夢を見ていた。何もなまっ白な空間、そこをずっと虚ろに歩いているだけの夢。

でも今日は違った歩き続けた僕の前にあの子が現れたんだ。

ピジョンブラッドの眼、僕が見えるはずのない「その色」を持つ小さな少女に会った。

「君は・・・」

「お兄ちゃん、お絵かきする時の楽しい気持ち・・・思い出せた？」

「えっ・・・？」

何故、この子が僕の心を見透かしたような発言が出来るのか。

子供じみた答えかもしれないけどこれが僕の夢の中だから全て見透かされているのかななどと思っている。何故か彼女の眼を見てると自分を見せられる気がする。

「ここはどこなの？こんなに真っ白な場所・・・君が連れてきたのかい？」

「ここはまっ白じゃないよ。お花もある、森もある、太陽、川、海、街、ここには



綺麗な色があるんだよ．．．でも今は全部、無くなっちゃってる」

「色が無くなる．．．？ここに綺麗な風景が広がってた．．．？そんな馬鹿な」

「[てた] じゃないよ、お兄ちゃんに見えていないだけ。お兄ちゃんにはまだ、わたしの色しか見えないよ？だから．．．」

そういつてその子が手がかがんでいうようにヒラヒラと揺らしているので屈んで彼女と同じ目線になると少女が僕の両頬を触って額をコツンとつけてきた。

「お兄ちゃんに [眼] を貸してあげる。これで世界の色が見れるよ、お兄ちゃんが望めばその [眼] はその世界を綺麗に映してくれるんだ。いろんなモノにあるとつても綺麗な色が．．．早く見つけて．．．この世界を見て」

「お．．．おい、どういう事なんだ。君は一体．．．!？」

「お兄ちゃんなら見えるよ。世界の色が．．．とつても綺麗ないろんな色が」

そこで目の前が光に包まれて次の瞬間、視界が開けた時には広がっていた光景は ARIA カンパニーの寝床の天上で外では小鳥の囀りと日の光が差し込んでいた。

「．．．．．今のは．．．．．一体．．．．．？」

夢だった。でもリアルなほどに頬に感じる少女のひんやりとした手の感触。

「んっ．．．．．んうん．．．．．はうあ．．．．．」

どうやら灯里ちゃんも起きたようで隣で大きく背伸びをしてむくりと起き上がる。

「おはようございますう〜・・・カイトさん〜・・・」

「おはよう、灯里ちゃん。さて・・・朝ご飯作らないと窓開けるよ?」

「はい〜」

そういつて窓を開けると朝の爽やかな風が吹き込んでくる。

「えっ・・・?」

風が自分の頬に触れる。だがそれだけではない、何故か、風が蛋白石（ブルーオパール）の色で眼に

見えていた。それが何故、風だと分かったのかは自分でも分からないけれど確かにこれは風なんだと頭は認識していた。

「い・・・今のは・・・?」

ふと我に返るといつものただ吹き抜ける風になっていた。今のはなんだったんだろう。

「カイトさん〜・・・あの・・・」

振り返ると灯里ちゃんが何故か、気まずそうにこちらを見ている。

「下に降りてくれないと・・・着替えられないんですう・・・」

考えたらここって灯里ちゃんの寝室なんだから着替えだつてここでするよね、そりゃ。

「ぎゅんぎゅん!!すぐ下降ります!」

そそくさと僕は一階に降りて先に朝食の準備をする事にした。

とりえあず今日のメニューは目玉焼きとサラダ、カリカリに焼いたベーコンとスープ、あと柑橘系のカットフルーツ小盛り合わせを作る事にして調理に取り掛かる。

「おはよう、カイト」

「おはようございませぬ。コホツ……おはよう、アリシア」

「よく出来ました、うふふ♪」

出勤してきたアリシアも加えて3人でいつものように朝食を取る事にした。

「やっぱりカイトさんの料理、美味しいですう〜!」

「ぷいにゅ〜!」

「ははっ、ありがとう」

最近、毎日の食事の時間が楽しみだったりする。

今日は何を作ろうかな? 味付けは何がいいかな? 美味しいと言ってくれるかな? など考えながら作るのが絵を描く事と並んで食べるのも作るのも楽しみなんだ。

「カイトは今日はどうするのかしら?」

「うん、ちよつと街を周ってみようかなって思う。アリア社長が案内してくるって

言うから頼んでみたんだ、ねえ、アリア社長?」

「ぷ、ぷい〜！ぷいにゆ〜ん〜！」

自分の胸をポンと叩いて任せろと言っている。相変わらずもちもちポンポンだ。  
・・・それから朝食を終えてしばらく経った後。

「それじゃ行きましょうか、アリア社長」

「ぷいにゆ〜ん〜！」

スケッチブックと道具をカバンに入れてアリア社長はリュックの上部に座るような形で街に繰り出す事にした。

社長で道案内大丈夫かって？とりあえず言ってること理解は出来るから大丈夫かな？

「うん〜！地球だところやって思いつきり滑れないから気持ちいいな〜」

基本的にこれが活躍する場所はかぎられていて遅刻しそうな時だけ裏道走るのに役立つ

つのだがこうやって気兼ねなしにエアースケートで走るのは久々だったりもする。

「ぷいにゆ〜ん〜！ぷ、ぷい〜ん〜！」

「あつちですか？わかりました、いきますよ、社長！」

エアースケートを走らせて風を切って疾走する。だがまたここであの色が見えた。

また風と頭が認識して目に風が蛋白石（ブルーオパール）色で見えてたんだ。

「ま・・また・・？なんなんだ、これ」

（お兄ちゃんに【眼】を貸してあげる。これで世界の色が見れるよ、お兄ちゃんが望めばその【眼】はその世界を綺麗に映してくれるんだ。いろんなモノにあるとつても綺麗な色が・・早く見つけて・・この世界を見て）

「まさかあの女の子が言つてた貸してくれる【眼】つてこれの事なのかな」

あの女の子は「望めば」と言つていたけど僕は無意識に見てしまつていいのかもしれない。という事は僕の意志でこの【眼】のONとOFFは切り替えられるのか？

「元に戻れ・・元に戻れ・・！」

少し深呼吸しながら目を閉じてまた開いてみると色は消えていて元に戻つていた。

「今度は風の色を見てみるかな・・望むのか・・色を見る事を・・」

また深呼吸して目を閉じると身体に触れる風に集中して心で風の色を望んでみる。

「（見せてくれ・・僕に風の色を・・）」

眼を開くとまた風が蛋白石（ブルーオパール）色になつていて何となく感覚を掴んだ。

「でも何故、あの子は僕にこの【眼】を・・？それにあのまっ白な空間が本当は

自然豊かな風景が広がつてるなんて・・何をさせたいんだ、彼女は」

夢の中の女の子は僕に世界の色を見てとそしてあの世界を染めてと僕にいった。

それが一体、何を意味するのかが僕には分からず考え込んでいた。

「ぶいにゆ〜?」

「あつ・・・ごめん、アリア社長。ちょっとぼおくとしてて、行きましようか」

「ぶいにゆ〜い」

アリア社長が僕の頭をポンポンと叩く。どうやらしつかりしろとか言ってるらしい。

「わかりました、頑張っていきましょう、社長? って・・・ん?」

僕が坂のところ差し掛かると目の前にオレンジが1つ転がってきた。さらにもう

1

つ、さらにその後にはじやがいもまで転がってきた。

「な・・・なんで、オレンジにじやがいもまで・・・?」

「わあ〜〜〜・・・転がっちゃう〜〜」

上から間延びのした声が聞こえてきたので見上げてみると女性が1人こちらに向

かっ

て走ってくるのだがさらにオレンジが3つ転がってきた。

そしてよくよくその人物を見てみるとオレンジプラネットのアテナさんだった。

「わわっ!?! なんて取ろうとしながら余計、落としてるんですか、アテナさん!」

ちゃんと押さええればいいのにちゃんと持たないで屈んでオレンジを取ろうとしてい

る

ので余計に袋からモノが落ちると言う悪性連鎖に陥っている。

僕はカバンを開けて転がってくるオレンジとじやがいを素早く放り込みながらエ  
ア

を  
ースケートで坂をバックしながらあらかた広い終えてアリア社長の方もじやがいを

を  
だ。2つ拾ってカバンの中に入れてくれてアテナさんも最後のオレンジを拾えたみたい

「これで全部みたいですわね、大丈夫でした？アテナさん」

「ええ、ありがとう。カイト」

「へ？カイト？」

何故にアテナさんまで呼び捨て？と思ったら彼女独自の理由があった。

「アリシアちゃんも呼び捨てなんだしお友達の時もそれで呼ばないと失礼かな」

って。同い年でさん付がおかしいんだもんね？」

「まあ・・・アリシア曰くそうみたいですけど・・・まあ、いつか」

細かい事を気にしていてもしょうがない。とりあえずは拾ったオレンジとじやがいの  
も  
をアテナさんの袋に入れ直してまたスケッチ場所を探しに行こうとしたんだけど何

故

かアテナさんに服を掴まれてクイッククイックと引かれている。

「あの・・・何か？」

「お礼、ここままでしてもらってそのままともいかないでしょ？お茶でもどうぞ〜」

「ぷいにゆ〜！ぷ、ぷい〜！」

「えっ？オレンジジュプラネットにいい庭があるですか？ふむ・・・」

色々な絵の素材を集めておきたいところではあるが少し悩んだが社長が言うなら本

当

にいい庭があるんだろうなと想い、アテナさんに向き直ってお願ひする。

「それじゃお言葉に甘えて」

「は〜い♪」

こうして僕、アテナさん、アリア社長の3人はオレンジジュプラネットに向かった。

「ん？あつ、カイトさん、どうしたんですか？アテナ先輩と一緒に来るなんて」

「いや、かくかく云々でね」

「なるほど・・・いつものアテナ先輩のポケポケ癖が出ちゃったんですね。それより

アテナ先輩を助けていただいてありがとうございます」

深々と頭を下げられるのだがそんなに大げさな事はやっていないので頭を上げて貰



う。

「あつ、そういえばここに綺麗な庭があるって聞いたんだけど教えてもらえるかな？」

「はい、でつかいおやすいごようです」

「で・・でつかい？」

「はい、でつかいお任せください。いきましよう」

「う、うん」

アリスちゃんって「でつかい」と付け加えるのが癖なのかな？初めて見る癖だけど。

それから庭に連れてきてもらった僕は感嘆の声を上げる。

清らかな水の流れを利用した水路に整備された芝生と綺麗に配置された木々にそ

こかしこに純白の花が咲いていてアリア社長のいうとおりいい庭みたいだ。

「さてと・・・」

僕はとりあえず壁際まで歩いてそこに座り込むと一旦、全体を広く見てみる。こ

うやつて被写体を決めただけどこがいいかなあ・・・？

しばらくすると飲み物を持ってアテナさんもきて隣に座ってきた。

「どう〜？少しはいい絵が描けそう？」

「ええ、おかげさまで。最後に感想くださいよ」

「うん、わかった」

アテナさんは隣に座ったまま僕が絵を描いているところをずっと眺めていた。

そうやっているのアリスちゃん、隣にやってきて同じように庭を見つめ始める。

「どうしたの、アリスちゃん？」

「カイトさん視線でみるとこの庭も違って見えるのかと思ひまして。灯里先輩が

見方一つでいつもの風景が違って見えると言っていたので」

「だったらアリスちゃんも一緒に描いてみる？たまには楽しいかもよ、お絵かきも」

「・・・そこまで仰るならやってもいいです」

アリスちゃんって意外と頑固というか、意地っ張りなのかな？何となくだけドスケツチブツクを貰った時の彼女の顔は妙に嬉しそうな感じがしたんだけどな。

「・・・・・・・・・・」

それからラフスケツチを描き、清書した後に色を塗り始める。

しばらく色を塗っていった後に筆を止めてもう一度、全体図を見て考え始めた。

このままだ色を塗ってもただの絵・・・何かいいアイデアはないものかな？

「~~~~~」

すると隣のアテナさんが歌を歌いだした。

見つめる僕に微笑みかけながら歌を続ける。どうやらリラックスさせようとしてくれたようで僕は静かにアテナさんの歌を目を閉じて聞く事にしたんだ。





「?」

か  
アテナさんの方はどういう意味だか分かっていないようだけれどこれは本当の事だ

ら、でも言っても信じて貰えそうにないよね・・歌声が色で見えてるなんてさ。

でもこの【眼】は僕にとつて本当に世界に隠れている別の色を見せてくれるのかも  
れない。後は僕がその色の存在を望むのか否か、まだ明白に答えは出ていないけど。

「ねえ、ねえ、カイト。この絵、貰ってもいい?」

「えっ、こんな絵でよければいいですけど」

「ありがとう・・わたしこの絵がとっても気に入ったわ。大切にするわね」

そういつてアテナさんは僕の描いた絵を笑みを浮かべながら眺めてくれていたんだ。

・・それから僕はそろそろ時間という事で社長と一緒に会社に帰る事にした。

「それじゃ今日はありがとうございませした。アリスちゃん、アテナさん」

「わたしは別に何もしていません。逆にお礼を言う方です、でっかい綺麗でした」

するとアテナさんが歩みよつて来て話しかけてきたんだ。

「わたしもアテナでいいわよ。アリスアちゃんと同じで同い年でお友達なんだから」

というか、あなたもですか、アテナさ・・いや、アテナと言った方がいいのかな?

「まあ・・アリスアで慣れたからいいけれど・・あくと」

どうせ他のところで丁寧語になつたらまた言われそうだし、ラフな感じで言った。

「それじゃこれからもまたよろしく、ア、アテナ」

「はい、よろしく、カイト♪」

夕日が沈もうとしている中で握手を交わす僕とアテナ、そして2人の影が伸びる。でも僕はその時、一瞬だけだけ2人の間に小さな女の子の影が見えた気がしたんだけれどももう一度、見たときには消えていた。

こうして僕は世界に隠れている【色】達を見る【眼】を女の子から譲り受けてまた1つ歌に隠れていた色【音色】を絵の世界に残して一歩前進出来た気がする。

今度はあの女の子に絵を見せたい・・・無表情のようにすら見える彼女の顔に少女の笑顔を見せてくれるようなそんな絵を・・・またどこかで会えるのかな？

・・・遠くからカイトを見つめる1人の少女・・・彼女がぼつりつつぶやく。

「お兄ちゃん・・・とつても綺麗だったよ」

ほんの少し、ほんの少しだが少女の顔には微笑みが浮んでいたのがあった。

## 第5話 そのネオ・ヴェネツィア色の心は……

僕はその日、いつものように街に出てデッサンのネタ探しをしていた。

「んっ？あれは……晁に藍華ちゃん？なんか着飾ってるな」

丁度、姫屋の前から出てくる師弟コンビの2人を見つけて向こうもこっちに気付いた。

「おはよう、カイト〜」

「おはよう、カイトさん〜」

「うん、おはよう。晁、藍華ちゃん」

何故、僕が晁を呼び捨てにしているか？もう言わなくても分かるだろう？

「2人共、どうしたんだ？そんなに綺麗に着飾って。行事か、何かあるの？」

「ああ、これから結婚式の渡り船をする事になってな。藍華はサポート役だ」

水先案内人はそんなことまでするのかと感心していると晁がにやりと笑みを浮べる。

「何だか非常に嫌な予感がする・・・」

人間、いい予感であたらない。悪い予感というのは嫌というほどあたるんだ・・・。  
「僕は晁に朝会った事を非常に後悔してるよ」

「なんだよ、折角、いい絵が描けるんだからいいだろう。文句ないだろ」

「あのね！確かにいいよ？でもだ、何故によりによって・・・！」

そういつてスケッチブックを持つ僕の前にいるその「被写体」について言及する。

「こんな晴れの日に描く記念の絵を美術学校レベルの男に描かせるんだよ！」

と  
こういうのは普通はプロに描かせるものじゃないのか？それを突如として呼ばれた

おもったらいきなり新郎新婦の絵を描いて記念品にしろだつて？アホかい!?

「(晁さんはこうと決めたら直進タイプだから諦めた方がいいわよ・・・)」

「(なんだか藍華ちゃんの苦勞が分る気がするよ・・・)」

「(ありがとう、あなたが初めてよ。わたしに共感してくれたのは)」

「何かいったか？その2人」

「いえ、なにも」

しかたがない、やる以上はいいモノに仕上げないと新郎新婦にも失礼だよな。

こう思った僕は気持ち切り替えて2人の肖像画を描き始めるのだが背景の色



を決めておくために僕はこの「眼」の力を使う事にした。

「結婚する幸せの色を背景に使えばもっと絵が引き立つもんね、さて・・・」

僕は集中を高めて一度、目を閉じ、また開く。すると2人の「色」が見えてきた。

「(えっ?)」

そこで違和感を覚えたんだ。新郎の色はとても穏やかで温かいクリームイエローの色なのに新婦の色は同じ色もあるけどグレーも内側に混ざっているのが見えた。

「あの失礼ですけど何かありましたか? 表情が少し硬いように思うんですけど」

「えっ?」

僕が言った言葉に驚いたように新婦が僕の方を見る。

「お前な、折角の式前になんて事言いだすんだ、申し訳ありません」

「い、いえ。あの・・・なんでそんな風に思ったんですか」

「似顔絵を描く時はその被写体の一瞬の画を頭に入れるんです。明るく笑顔になつていてもさつき一瞬でしたけどあなたの顔はこうでしたよ?」

そういつて僕は描いた似顔絵を新婦に手渡す。その絵は微笑みながらもどこか寂しそうでそれを見た本人も他の面々も驚いたような顔になっていた。

「ははっ・・・いけないわね、折角の結婚式なのに。上手く誤魔化してただけけど」

少し笑っていた新婦がその理由について話し始める。

「実は今日の結婚式に学校の子供達も呼んでいたんですけどその中の一人の子に大嫌いだって言われてしまって・・・その前は仲良かったんですけどね」

その子は「ソラ」という男の子らしく、本当は優しい子でそんな事を言う子ではないという。何となくだが男心的に考えてみた僕は自分なりの感想を述べる。

「たぶん、好きの裏返しなんじゃないかなって思います。ソラ君は本当は先生の事は今でも好きですよ、でもだからこそ認めたくないのかもしれない」

「認めたくない・・・ですか？」

「なんとというか認めたらお別れしなきゃならなくなる、だけど先生は好き、そんなごちゃ混ぜな気持ちのままその言葉を言ってしまったんじゃないかなって。

たぶん彼も後悔してるかもしれないですよ、時間は掛かるかもしれませんがね」  
その内、先生にお祝いの言葉を言いに来ますよ、男から見るとですけどね？」

僕の話をもっと先生も聞いてくれていた。藍華ちゃんや晃、新郎さんまで一緒にあって聞いてくれていてくれるけれどこんなに偉そうな事を言える立場じゃないよね。

僕も最近になって自分の気持ちを認められたレベル、だから言えるとも言えるかな？  
「そうですか・・・ありがとう、少し楽になった気がするわ」

「あつ、ちよつと待っててください」

僕はスケッチブックを返してもらいその『一瞬』に絵を描き変えてまた彼女に見せる。

「この絵で色づけをしますがよろしいですか？新郎新婦？」

そういつて僕は2人に絵を見せると笑みを浮べて僕をもう一度、見やると言った。

「はい、これでお願ひします」

「わかりました、出来上がりしましたらお送りしますね。楽しみにしててください」

「ええ、楽しみに待ってます。ありがとう、カイトさん」

こうしていると晁が肘で突っついてきたのに気付いて耳を傾ける。

「（お前・意外と人の事をよく見てるんだな。わたしでも気付かなかったぞ）」

「（ううん、前の僕なら気付かなかった。今は少しだけだけど色が見えるんだ）」

「（色が見える?）」

おっと。この話をしても分かるはずないよね・・・僕は適当に誤魔化して部屋を出る。

晁から後で結婚式もみに来いと言われた。折角だし時間になつたら身にいこうかな。

それから僕は式場を後にしてARIAカンパニーに戻る事にした。その道中・・・

「ん？あれは灯里ちゃんに確か・・・郵便屋のおじさんだったかな？」

灯里ちゃんの横に蒼を基調とした制服姿のご老人が立っていて通称『郵便屋のおじさん』と呼ばれている人でたまに世間話をする中だけでもう1人男の子がいた。

「灯里ちゃん！郵便屋のおじさん！」

「あつ、カイトさんく！こんにちわく」

「おう、ボウズく！こんにちわく」

「こ・こんにちわ」

「どうかしたの？こんなところで？」

「いえ、実はですね・・・」

それから灯里ちゃんに話を聞いたのだけれど僕は驚いた。さっきの先生が言っていた  
た

『ソラくん』がこの目の前にいる男の子だったんだ。これには2人も驚いている。

「それじゃソラくんの先生と会ってきたんですか？」

「うん、晁に無理矢理記念品の絵を描けなんて言われて強制連行されたけどね」

「ははっ・・・晁さんらしいですう」

とりあえず僕はソラくんの前に行くとしやがんでさつき描いてきた絵を見せる。

「これ・・・先生・・・。やっぱり笑ってる」

何となくだけど自分がいなくても笑ってるんだと思っっているのかもしれない。男心  
な

らある程度、分る。ちよつといじけたくなるんだよな、こういう事って。

「でも先生がソラくんの話をする前は・・・こういう顔だった」

僕は目のラインと口元のラインを描き直してさつき修正する前の先生の顔に戻した。  
「あつ……」

その絵を見たソラくんがまた驚いた顔をしている。

「そつ、先生はソラくんが来てくれなくて寂しがってた。でも話をした後は笑顔だった」  
僕はその場に胡坐をかいて座ると彼の心境を予想して言葉を続けてみた。

「本当は先生が大好き、離れるのが寂しい、でもそれを上手く言えない上に整理も出来なくてついカツと言ってしまつて今頃になつて後悔してる、違う？」

「……うん」

ソラくんも体育座りで座り込むと僕と真正面を向き合つて話を聞いてくれた。

「本当はおめでどうつて……言いたい。手紙……渡したい」

その手には手紙が握られていた。そこで僕はしばらく考えた、ここからゴンドラでさつきの教会まで灯里ちゃんのと小1時間。

とりあえずは原画がすでに出来上がっているし、間に合わない時間じゃない。

「灯里ちゃん、ちよつと教会まで漕いでもらつていい？」

「えつ、どうするんですか？」

「届けにいくんだよ、ソラくんの手紙とこの絵を一緒にね？」

「ええつ!?今からそれを仕上げるんですか?!いくらなんでも無茶じゃ」

だが何となくだけど僕は出来る気がした。この子に偉そうに言ったんだ、やってみせなきや男の先輩としてはカツコがつかないよね、頑張ってみせないと。

「郵便屋のおじさん、悪いんですけど付き合っただけで貰ってもいいですか？」

「おうよ、ボウズの頼みは聞く気だったからな。いっちょよ、届けてやるとしようか」

「はい」

こうして僕達は結婚式の行われている教会に向かう事にした。そしてソラくんも一緒に船に乗せた。自分で言葉に出来るならやってみな、と彼に言ったんだ。

一緒に僕も絵を渡すから、つまりはリミットは1時間、その短時間で仕上げに入った。

「(まだ【この色】は見えないけれど色の比率でどうにかする、ルーージュは鮮やかに

ドレスは白を栄えさせる補助色で・先生の髪の色も光源度を上げてまとめ)」

僕はこの【眼】を持ってから絵に集中する感覚が変わっていた。1つ、1つの色を再現するのに以前より的確になっていてたぶん、事象の【色】を映像として捉えられる分、ただある色を見て染めるより深い部分を表現できているのかもしれない。

……それから1時間後。

なんとかほぼ完成に近づいた絵を持って僕は郵便屋のおじさんと共に先生の元に向か

ったんだけどソラくんはやはりまだ思いきれないらしく置いていく事になった。

郵便屋のおじさんが代わりに手紙を受け取り、僕も絵を持って2人の前に立った。

「あなたはカイトさんに郵便屋さん？」

「あなたにお手紙を届けにありがとうございましたよ。宛先人はソラくんからです」

「ソラくん！本当ですか？」

そういつて郵便屋のおじさんから手紙を受け取った先生がそれを開け、読み始める。

先生、いつも困らせてごめんなさい。

お別れ会するとき、ひどい事言つてごめんなさい。

清々するなんて嘘ついてごめんなさい。

本当はおれ、先生の事、大好きです。もうお別れだと思つと寂しくて……。

おめでとが言えなくて、ごめんなさい。

先生、結婚おめでと。しあわせになつてね。

ソラより

「ソラくん……」

そういつて涙を浮かべながら笑みを浮べる先生。そして僕は【眼】でもう一度、見た。  
 「（これがこの絵の最後のピースか）」

それは本当の意味で幸せにやっとなが心晴れ渡ったのかもしれない。どこまでも澄み切

った【空の青（スカイブルー）】それが先生の周りにはみる事が出来たんだ。

「先生、これが本当の先生の絵です。あなたの顔は今、とてもいい顔していますよ」

そして僕もその絵を先生に手渡した。全てのピースが揃って完成した絵を。

「うわあ・・・素敵・・・。ありがとう、カイトさん、郵便屋さん」

こうして僕と郵便屋さんは仕事を終えたのだがやはりソラくんはやってこなかった。

教会の裏手にゴンドラを止めて待っていた灯里ちゃんとソラくんの元にやってくる

と【眼】で見たソラくんの色は感情を表すかのようにぐちゃぐちゃだった。

「・・・あつ、あれは」

僕が視線を移すと晁のゴンドラで海を渡っている先生と新郎の姿が見えた。このま

まだと本当に何も言えずにお別れになる。これでソラくんは後悔しないのか？

「（男の場合は無理にでも切欠ないと駄目か・・・！）ソラくん」

そういうと僕は空の手を握って立ち上がる。

「ごめん」



そうして僕はエアースケートに靴を切り替えてソラくんを背負うと奔り出した。

「ソラくんの本当の優しさが手紙の一文、一文から伝わってくるみたい」

「ソラくんにとつてそれが精一杯のお祝いなんでしょうね」

「ええ・・わたしはあの子にとつていい先生だったんでしょうか」

そうきく先生の質問に答える言葉を探していた晃が何かに気づき、藍華が言った。

「ふふつ、そうみたいですよ？」

「えっ・・？・・あつ」

先生も気付いたのか目線を裏に向ける。そこには・・・。

「先生・・ちよつと待つてくださいーい！」

水の上を滑るように向かってくるカイトと背中に背負われているソラの姿だった。

何とか僕とソラくんは追いつくことが出来た。このエアースケートは特別製で3分

くらいなら水の上でも止まる事が出来るし、滑り続けてれば5分は浮けるんだ。

「先生・・」

「ソラくん！手紙ありがとう、とつても、嬉しかった！お返事、書くから！」

そういつてソラくんに最高にいい笑顔を見せてそう叫んだ。

「先生おめでとう・・元気でね！」

しかしその時、いきなりエアースケートが沈む感覚に見てみると足が水面についてい

た。

「お、お兄ちゃん!? 沈んでる、沈んでる!?!」

「ヤバイ! 重量2人分だと予想以上にもたなかつた! 岸に戻るぞ、最後にちやんと、な  
?」

「うん。先生〜! さようなら〜!」

それだけを最後にちやんと言い切つたソラくん。僕らは離れていきながら手を振つてい

くれている先生と新郎、晁と藍華ちゃん達に手を振つてそこで別れたんだ。

それから僕と灯里ちゃん、郵便屋さんはソラくんを家まで送り届けた。

「ありがとう、お姉ちゃん、お兄ちゃん、それに郵便屋さん」

「うん、じゃあね。ソラくん」

「あいよ!」

そういつて僕達はゴンドラでソラくんの家を後にする。そして手を振る彼の色を見た。

「(ふふっ・先生と【空の青(スカイブルー)】同じか。いい色になったね、ソラくん)」

彼に手を振りながら僕は残りの郵便物を配達する2人の手伝いをする事にした。

こうして僕は日が暮れるまで郵便配達をやり、最後の配達物になった。

「ふうく、これで最後の配達、終了く」

「おつかれさまでした」

「ありがとよ、嬢ちゃん、兄ちゃん」

そうして僕達はお茶を飲みながら談笑を始める。

「なんだか郵便屋さんが一日もお休みできないって言った意味が分かる気がします。

やりがいがあるお仕事ですよね？」

「ぷいー！ぷいー！」

「はいはい」

そういつてアリア社長にお茶をもう一杯入れて手渡すとまた話を始める。

「今日一日回ってみて改めて気づいたんですけど。ネオ・ヴェネツィアってポストの数が多いんですね？」

「ああ、この街の人間はいまだに手紙にこだわってつかんなく。わざわざ面倒な事をやりたがるんだよ、まったく不便でなんねえく」

そういうながらため息を吐いて腰を2、3回叩きながらそんな事を言う。

「ふふ、本当ですね。どうしてでしょう？」

「確かにメールとかの方が楽なんだろうけどね」

「うん、たぶんあんまり急ぐと心がおっつけねえからじゃねえかな？」

「ああ・・・」

「手紙つてのは受け取った時は嬉しくて開ける時は宝箱みてえだよ、心が子供みてえに燥ぐんだ。んで中に入ってるのが手紙つて形をした相手の心なんだよな」

「あつ」

僕もそして灯里ちゃんもたぶん、さっきの先生の顔を思い浮かべたんだと思う。

「そいつは内容によつちや宝物にもなりやがる。一生、手で触れる事が出来る、心つていう宝物になあ？」

「触れる事が出来る・・・心・・・」

「それによお、手紙は時間や場所を飛び越えて書いた人を連れてくる事も出来るんだかんあ〜？」

そういつてしばらく僕達はお茶の香りと流れる風の感触と音の中を進んでいく。

「ネオ・ヴェネツィアも手紙と似てますよね？」

「ん？？」

「この街をつくった人の心にはいつでも手で触れる事ができますから」

「ああ、そうだな。それを言う兄ちゃんの絵もそうだよな？」

「え？僕の絵ですか？」

いきなり話を振られたので驚いたのだが郵便屋のおじさんは話を続ける。

「兄ちゃんの絵も手紙と同じでよ、その時の人の心だとか時間や場所を下手すり

や手紙より鮮明に残してる。言葉や文字にしないでなくてもその絵に描いた奴の心がはいつてりや、手紙みたいに一生物の宝物になりやがるもんなく？」

僕はその言葉に絵を渡した時の先生の顔を思い浮かべる。僕が描いた絵でもあんなに喜んでくれていた、あの絵のようにとてもいい笑顔で。

「わたし・・・面倒な事をやりたがるこの街が大好きみたいです」

「ほっかゝ・・・嬢ちゃんもすっかりネオ・ヴェネツィア色に染まったなく」

「はひっ♪」

「ネオ・ヴェネツィア色・・・僕も染まれるかな・・・？」

僕はそんな事を口にした。まだ来て間もないけれど少しずつ僕を変えてくれている

ネオ・ヴェネツィア・・・いつか『あの色』と向き合える日もくるのかな？

「カイトさん？」

「あつ、ごめん。なんでもないよ、灯里ちゃん」

一瞬、表情を暗くしたのを見られたのか心配そうに見る灯里ちゃんに笑顔を向ける。

「それならもう染まつてるんじゃないかねえかよ、兄ちゃん」

「へ？」

「兄ちゃんだつてわざわざ手で絵を描いてるだろ？メールみたいに写真でやればいい

つてのに。その目で見た光景を自分の手で残したいって思うんじゃないかい？ 兄ちゃんはまだ浅いかもしんねえけどこの街に触れて色に染まれてるだろうさ」  
言われて改めて思う事。昔の自分なら言われても分らないかもしれないけれど絵を

描ききる達成感、その一瞬に出会えた時の喜び、今まで忘れていた気持ちを思い出して絵と向き合っている今の自分にはとても響いてくる言葉に思えた。

「はい・・・そうですね」

「ぶいにゆ〜」

「カイトさんなら染まれますよ。とつても綺麗なネオ・ヴェネツィア色に♪」

僕は海に沈んでいく夕日を見つめながらとても心が穏やかに温かくなった・・・。

・・・そして次の日。

「おはようございまふう〜・・・」

「おはよう、アリシア」

「おはよう、灯里ちゃん、カイト」

すでに朝の支度を始めているアリシアが来ていた。

「ぶいっ？ぶい、ぶいにゆ〜！」

するとアリア社長が何かに気付いたのか机の上を指差して鳴いている。見てみると

机の

上には一枚の手紙が置かれていて見てみると郵便屋のおじさんからだった。

「今朝、届いてたお手紙よ？」

「あつ」

灯里ちゃんがそれを手に取ってドキドキしたような顔つきで僕の隣に来ると一緒に覗き

込んで郵便屋のおじさんからの手紙を読んでみる事にした。

嬢ちゃんと兄ちゃんへ。

昨日はありがとよ。

郵便屋のおつちゃんより

「えへへっ・・・♪」

とても嬉しそうな笑顔で手紙を抱きしめている灯里ちゃん。いつもの素敵顔だね？

「郵便屋さんの言った通りであらう。手紙は書いた人を連れてくるんですねえ」

そういう灯里ちゃんの言葉の意味も分かる気がするんだ。

その手紙は古ぼけたインクの色が『黒』だけなのにとても温かくてそれにちよつぴりだけど郵便屋のおじさんの煙草の匂いがして確かに『ここに来てくれて』いた。

今度の教授への連絡・・・メールじゃなくて手紙で書いてみようかな・・・？



## 第6話 その春に見つけたものは・・・

その日、僕は朝から街に出ていた。ネオ・ヴェネツィアは本当に豊富なほどに画材が揃っていて毎日が発見に溢れていて飽きが来なかった。

一仕切のデッサンを終えた僕はARRIAカンパニーに戻ってくると丁度、アリシアがバケツを用意しているところで僕に気付くといつもものスマイルで話しかけてくる。

「アリシア、どこか行くのかい？」

「あら、カイト。丁度いいところに来たわね、今からピクニックいくのよ」

そういつて指差したバケツにはお弁当と水筒にシートが入っていた。ARRIA社長

もいつもの会社の帽子ではなく、麦わら帽子をかぶってゴンドラに乗っている。

「お弁当を持って前に教えてもらったとても素敵な場所に行ってみようと思って」

「あつ、カイトさくらん」

声をかけられて振り返ると灯里ちゃんも荷物を持ってどうやら一緒に出掛けるらしい。

「うふふつ、それじゃカイトも来たことだし、早速、出かけましょう?」

「はい!」「ふいにゆ〜つ!」

「うん」

僕とアリシア、社長、灯里ちゃんの4人は灯里ちゃん操縦の元、ピクニックへと向かった。それにしてもピクニックなんて幼稚園以来、ちよつと楽しみかも(笑)

それからしばらくゴンドラに揺られながら太陽の光を反射して輝く水面やそよ風で揺れながら緑葉を輝かせる森林を眺めてこれだけでもとてもすがすがしい気分だ。

「ねえ、アリシア。とっておきの場所ってどんなところなんだい?」

だがこの後、アリシアから飛び出した発言に海に落下しそうになった。

「実はわたしも教えてもらったのが前でうる覚えなのよ、でも思い出せると思うわ」

「・・・大丈夫なの?」

「あらあら、カイトは心配性ね、うふふ♪」

いや、うふふ♪じゃなくて場所がうる覚えなのにピクニックに行くとかって大丈夫なのか・・・というかアリシアって案外、天然というか弟子は師に似るっていうけどもしかして灯里ちゃんの天然はアリシアゆずり?なのかな。

「ふうく・・・いい風だね」

入り組んだ河川を進んでいき、森林が豊かな地域にやってきた。このゴンドラが風を切つて進んでいく感覚が最近ではとても好きになった。

「ふふつ、最近のカイトはとってもいい表情になったわね」

「そ、そう?」

「はひ。最初に会った時よりずっと素敵な笑顔ですよ。キラキラ輝いてます♪」

自分ではあまりよく分からないけど2人がいうならそうなのかも。でもあれだな、前より確かに前向きに捉えられるようにはなつたかもしれない。

「あつ、そうだ。絵の題材をとるのにカメラを貰ったから記念写真撮ろうか」

「あらあら、いいわね」

「はひつ!」「ふいにゆ〜」

ここで4人そろつての記念撮影になった。タイマー式なのでポーズをとる余裕はある。

「それじゃ、1たす1は〜?」

「カイト、ちよつとそれは古いかもしれないわね（苦笑）」

「ちよつ!?!これ学校いつてた頃だつて使つてたんだぞ、アリシア!」

「ふふつ♪」「ふいにゆ〜い!」

ここでシャッターが下りた。見てみると一人顔を赤くした僕を可笑しそうに笑っているアリシアに灯里ちゃんも社長の姿があつてこれ僕だけ赤っ恥写真じゃない？ そんなこんなもありつつ、ようやくついたらしくゴンドラを岸に止めた。

「へえ〜・・・綺麗な場所だな。映像とかでよくある光景だけど実際、目にする」と僕はカメラで角度を変えつつ、風景の写真を撮っていく。このまま使うのもあるが絵の背景のモデルとして使う事も出来る。

地球にいた頃は映像を参考にしてたけど映像じゃ分からない葉の一枚、一枚の鮮やかさだとか土の質感だとか実際に見て触らないと分からないものばかりだ。

「ぶいにゆ〜」

そんな声に振りかえるとアリア社長が自分の身長くらいはあるバスケットを持って行こうとしているがちよつとつらい気がしますよ、社長。

「あつ、社長、わたしが持ちますよ？」

「ぷい、ぷい〜」

任せろと言っているようでそのまま運んで行ってしまった。あれだよね、男って女の子の前だと見栄と言うか、男らしいところを魅せたくなるものなんだよ。

いや、僕だって恋愛くらいはした事あるんだ、まあ：前の性格だから振られたけど。

「アリシアのとっておきの場所ってどこ？」

「あらあら、ここは入り口、出発点よ？」

「!?」

それに少し「えっ？」というような顔をした社長を僕は見逃さなかったと補足しておくよ。

「うわあ〜♪カイトさん、カイトさん！このお花、可愛いですよ〜！」

灯里ちゃんがそういつて指差したのは小さな黄色の花で身を寄せ合うように咲いていた。

「うん、そうだね。これも写真、写真」

「(ぐう〜〜〜)」

「[[c]]」

突如聞こえてきた変な音に3人そろって?になったが音の先を見つめてみると社長だった。

「ぶいにゆう〜・・・」

どうやらお腹が空いてしまったらしい。

「あらあら、それじゃお弁当にしましょうか？」

「わーい♪アリア社長、お待ちかねのお弁当ですよ〜♪」

「ぶい〜い〜い〜♪」

「あらあら」「ありやありや」「・・・ぶっ」

言葉は違ったが同じ様な意味合いで言葉が被り、アリシアと見つめ合うと笑ってしま  
う。

「はっはっはっは♪」

なんだか最近は無理なく感情を出せる気がする。普通に笑って、怒って、泣いて、楽  
し

んで前はふさぎ込んであまり感情を出さなかったのが馬鹿におもえるくらいだ。

「うわぁ、素敵♪」

お弁当箱を開けると色とりどりのおかずに社長の顔を真似たご飯と手の込んだ作り  
だ。

「いただきまーす」

「うふふ♪」

・・・それから昼食を終えて僕達は先に進む事にしたんだけどふと僕が向けた視線  
の先にあの黄色い花達がまるで道を作るかのようにずっと咲いているのを見つけた。

「これは・・・」

「うふふ♪きつと素敵な場所への道しるべよ、さあ、行きましょう、カイト、灯里ちゃん」

「はひっ・うん」

それからしばらく歩いていくと石造りの大きなトンネルが見えてきて3人で中に入る。

目の前の光の方へと歩いて開けた場所に出たんだ。

そこにあつたのは駅と書かれた看板に重い物資を運搬する際に使う古びたクレーンな

どですでに廃墟になっているようだがここに鉄道があつたのだろうか？

「ここはね、アクア入植初期に使われていた経綸鉄道の駅よ」

「はひつ、鉄道の駅だったんですか」

「ええ、今では訪れる人もいない廃墟だけど開拓当時の人達はここから各地に街づくりに必要な材木や岩石を運んでいたんですって」

その話を聞いて改めて周りを見てみる。ここからこのアクアが始まったのかなと思うと

ただの廃墟と言つてしまえばそれまでだが今の僕にはアクアの歴史を見たようで想いを

はせてみたらとても壮大で凄い場所に立っているんだなと思えた。

「ふふふ〜ふふふ〜」

何やら痛そうな音と社長の声が聞こえてみてみたら社長が顔面から段差の下に落ち

てた。

「社長、大丈夫ですか？あんまりはしゃぐと怪我しちゃうぞ、まった・・・これ？」

僕は社長の落ちたところまでやってくるとある物を見つけた。

「線路だ、もしかしてさつき来た道にもあったのか？それにここにも花が咲いてる」

「これはね、養分の少ない場所にも咲いて土地を豊かにする働きがあるのよ？」

「へえ、こんな小さいのに働き物なんですネ」

花1つ1つは小さいかもしれないけれどこの花達もかつてはアクアのために働いた

あ

る意味では「偉人」達の1人なのかもしれない。

「うわあ〜♪どこまでも線路をたどって歩いていきたくなる風景ですネ〜♪」

森に囲まれた線路をたどっていくと開けた場所にてずつと線路が続いていた。

「だったらどこまでも行ってみようよ、灯里ちゃん」

何故か僕はそんな事を口走っていた。でも本当に行ってみたくなくなったんだ。

「あらあら。だったら行ってみましょう、どこまでも」

「えっ、ここもアリシアさんの行っていたとっておきの場所じゃないんですか？」

「ここは通過駅。春探しの探検はまだ続くのよ〜♪」

「はひ〜♪」



こうして僕達は線路に沿って歩いていく事にした。どこまでも続く線路と平原、そして視線を向ければ水平線や空を流れていく雲、風の音が五感に訴えてくる。

「ずん♪ずん♪ずんたかつ♪ずん♪ずんたかつ♪ほこ♪てん♪ずんたかつ♪ぽくん♪」

灯里ちゃんが木の枝を指揮棒代わりにしながら鼻歌を口ずさんで意気揚揚と前を歩く。

「本当に天真爛漫な子だよな、灯里ちゃんて」

「うふふ♪それが灯里ちゃんの素敵な魅力なのよ?」

「確かに(笑)」

アリシアと談笑を楽しみながら僕もその灯里ちゃんの鼻歌に合わせて口笛を吹いてみる。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

「あらあら♪うふふ♪」

そんなハミングをしながらまたしばらく歩いていくと道が2つに分かれている。

「あらあら・・・分かれ道ね。どうしましょう、どっちだったかしら?」

「やっぱり道忘れてたのね・・・(汗)」

朝の出発前の不安が的中してしまった。やっぱり天然というのも考えモノのかな。

「何か思い出せることないの、アリシア?」

「随分前に連れて来てもらっただけだから・・・困ったわね」

僕とアリシアが思案していると灯里ちゃんが徐に木の棒を地面に建て始めた。

「そういう時は、こうです！」

そして手を離すと木の棒は右の線路の方に倒れた。

「きつとこつちです、アリシアさん、カイトさん」

「ぶ、ぶいにゆ〜い！」

「レッツラ、ゴー！」

「あらあら♪」

この際だし運まかせていうのもいいのかもしれない。それに従ってまた歩き始めた。

しばらく歩いていたら日も傾いてきてそろそろ帰った方がよさそうだ。

「灯里ちゃん、もうそろそろ帰りましょう」

アリシアも同じことを考えていたらしくそう提案する。

「あの木。あの木までいってみましょう、カイトさん、アリシアさん」

線路がさらに伸びている少し先の丘に一本の大きな木が立っていた。とりあえずは  
き

りがいいところまで行こうという事になって僕達はその木まで歩く事にした。

丘を登り切った先にあつた光景は思いもしなかつた風景が広がっていたんだ。

「はああく……」

2人の声が重なつて同じように驚いているようだ。

「あれ桜の木に……電車だよね」

丘を登つた先にもう1つ小さな丘があつてそこには古びた電柱とそれに繋がつて線路

上に止まっているこれも古びた1両の電車と隣に大きな桜の木があつたんだ。

「もう何十年も前からここに捨てておかれたみたいね」

僕は電車の中に入つてみた。さすがに古くて踏みしめるたびにミシミシと鳴った

け  
どなんだかこの音も面白く感じる。

するとアリシアが読んできて歩み寄ると電車の天井が大きく抜けていて真上が見えた。

「ここだけ天井が抜けてるんですね〜！」

「うふふつ、そのおかげでここだけ花びらの絨毯ね♪」

2人は徐に席に座るとそのまま花の絨毯の上に寝転がつて絶景の桜を見上げる。

「どれどれ僕もつと」

車両の壁を背もたれにして僕も天上から桜を見上げるまさに桃色の空が広がっていた。

「綺麗ですね」

「ええ・・・」

「この桜は何十年もここでずっと一人ぼっちでこんな素敵な場所にいたんですね」

「そうだね」

だがしばらくして灯里ちゃんが申し訳なきように話を切り出した。

「でもわたしがあんな道の決め方をしちゃったせいでアリシアさんのとっておきの場

所にいけなくて・・・ごめんなさい」

確かにアリシアが行こうとしていた場所には行けなかったけどこれはこれで十分に  
素

敵な場所でもいいような気もする、変な話、偶然の失敗が成功になったとも思う。

「ねえ、灯里ちゃん。こんなお話知ってる？」

「はい？」

「ある旅人が探し求める物を探す旅に出るとき、師に言われたの。絶対に道を見失つてはならない。もし一つでも間違えたらお前の求める物に辿り着けないからと」

「・・・・・・・・」

何となくだが自分の事の様に聞こえた。道を失っていた僕は自分の求めていた絵や考

え方をする事が出来なくて自分の求める物からは程遠く遠ざかっていた。

でも・・・それが今では良い事のように思えてしまう、でなければ今は無かったのだから。

「でも彼は不幸にも道を見失った。力なくうつむく旅人・・・」

その話の旅人に自分はどうにも重なって感情移入してしまう。

「だけど再び顔を上げた旅人の目の前に広がっていた光景はかつての旅人が求めたものの以上の素晴らしい世界が広がっていた」

そういつてアリシアは目の前に広がる桜の光景に手を伸ばしてずっと見つめる。

「失敗や寄り道をしないと見つからないモノもあるってお話・・・ふふ♪」

「アリシアさん・・・。ありがとうございます♪」

「あらあら♪」

「ぶいにゆ〜!?!」

「「んっ?」」

アリア社長の声が聞こえて窓から見てみると電柱の配線に社長が絡まってジタバタしている。

しかし暴れたことで古びた配線が切れてその衝撃で火花が散って電撃が奔る。  
「にゃーにゃーにゃー!?!」

刹那、一陣の風が吹いて花びらが舞いあがり、僕達を眩い光が包み込んだ。

「……………」

その光は電車内の蛍光灯だったようでどうやら何十年も経っていたのに電気だけは生きていたみたいだ。

そしてその光に照らされて桜が明るい時とはまた違った人工的な光に照らされている別の顔を見せて僕はまたその光景を写真に収めた。

「……………綺麗だ」

「ええ……………本当に……………」

隣り合わせに座った僕とアリシア、そして向かいの席に座った灯里ちゃんもしくばらく、その夜桜の鮮やかさに目を奪われて余韻に浸る様に見つめ続ける。

「ぷい〜!〜ぷい!〜ぷい〜!〜」

「アリア社長〜!大丈夫でしたか〜?」

「良かった、なんともないみたいね」

そしてまた外の風景を見つめながら自然と3人は笑ってしまっていた。

「アリシアさん、カイトさん、わたし達やりましたね?」

「うん、灯里ちゃん」

「そうだね（笑）」

「「とっておきの春、みつけた」」

「ぷいゆいゆ♪」

こうして僕達の春探しの探検は素敵などとおきの場所を見つけて終わったんだ。

……そして次の日、僕はいつものようにデッサン場所を探して走っていた。

「つと……この脇道って考えてみたら通った事なかったよな……」

いつも通る道の横に伸びている脇道。いつもは気にも留めていなかったけどあれ以来

こういった場所がどうにも気になってしまっている。

「たまには寄り道してみるのも……いいかもね」

僕はその脇道に入ってみる事にした。さあ、素敵探しの探検に……行っていますか！

そしてカイトの後ろを同じように歩く1人の少女。

踊る様にステップを踏みながら彼の後を鼻歌交りについていく。

とても嬉しそうに。そしてワクワクするような好奇心に満ちた無邪気な瞳で彼を見つめていた。



## 第7話 その白い妖精つたら・・・

ある日、僕はアリシアにこんな事を言われた。

「ねえ、明日のお休みはわたしに付き合っただけでもいいかしら？」

「えっ？うん、別に僕はいいけど」

何か買う物が多いのか？わざわざ付き合ってくれだなんて荷物持ち大変そうだな。

「あらあら、それじゃ明日の9時にサン・マルコ広場の時計台に集合ね？」

「分かった」

「うふふ♪明日が楽しみね」

そんなに買いたいものがあつたのかな。でも普段からお世話になっているんだしこ  
うい

う時くらいは男を見せないと料理だけってのも何だか悪い気がするしね。

・・・そして翌日。

「お〜い、アリシア〜！」

「あらあら、カイトも早かったのね？まだ10分前なのに」

「そういうアリシアこそ早いんじゃない？僕の方が待たせちゃってるくらいだし」

「うふふ♪今日のお出かけが楽しみでちよつと寝不足なのよ」

「そんなに何か買う物があるのかな？と未だに内容が理解できていない僕は首を捻る。

「それじゃ早速、いきましよう。2人っきりのお出かけよ」

「こーういつてアリシアが僕と腕を組むように身体を寄せてくる・・・んっ？」

「ちよ!?ちよ!?ちよつと!!アリシア何してるの!!」

「何って腕を組んでるのよ？男女が歩く時つてこーういうものじゃないかしら？」

いや、それつて普通恋人とか、夫婦とかさういう関係の人達がさういうのをするわけ

で僕達は居候と家主というか、仲間というか、さういう仲でまだ恋人だとか恋愛関係

になつてゐるわけでもないのにいきなり腕を組まれて僕は顔が真っ赤になつた。

「一度こーういふお出かけを試してみたかつたのよ。なかなか頼める殿方はいないし」

だからつて会つて二週間程度の男に頼む内容なのかくらいわかるだろう、アリシア

(汗)

気を許してもらえるのはいい事だけどあまりにも無防備過ぎる気がして仕方がない。

「それともわたしじゃご不満があるかしら？」

「い、いや、そんな事はないよ！でもこういう風に女の子と買い物とかした事ないし」

「うふふ♪大丈夫よ、その場、その場を思いっきり楽しんでやえばOKだから」

そういつたアリシアにリードされるようにして僕は彼女との買い物に出掛ける事になった。

「まずはここよ」

やってきたのはいつも夕飯などにパンを買いに来るパン屋でまだ仕込みをしている途中なようなのだがパン屋のお姉さんがアリシアを見つけて出てきた。

「あつ、アリシアさん！おはようございます、今日はお2人でお買い物ですか？」

「ええ、それと昨日、予約しておいたアレ。出来てます？」

「もちろんですよ！少々、お待ちください♪」

どうやらアリシアは何かを頼んでおいたらしい。まずはそれが買い物の一つ目かな。

「はい、カイト」

「え？これは・・・サンドイッチ？」

「ここはね、予約しておく朝食用のBLTサンドを作っておいてくれるのよ。わたしはよくここを利用するんだけど今日はカイトにも教えてあげようと思って」

とりあえずは朝食をとってからって事なのかな？言われるままにサンドイッチを頼

張る。

「あつ・・美味しい?・・・♪」

クリームチーズ入りっていうのは初めてだけど美味しいな。それにこの味はクレイジー

ソルトかな?これはまた新発見、今度のメニューに加えてみようかな。

それから僕とアリシアは朝食を取りながら次の場所へと向かう事になったんだ。

「今度は(ハハ)よ」

「(ハハ)は工芸品専門店? (どういう事なんだ? 何故にこの店?)」

よく分からないまま店に引き入れられて2人で店を見て回った。ガラス工芸やはた

また

画材やら一般の芸術作家達が売り物として作品を出していたりするらしい。

「ここでまだ名の売れていない芸術家達が自分の作品を持って売り物として頼むのよ」

「へえく・・・値段とかも自分で決めるの?」

「うんうん、値段は決められてなくて買う人が自分で決めるのよ? この店に来る人は多

くが芸術に関してこだわりを持つ人ばかりだからいい作品程、高く買われるの」

つまりは本当の絶対実力主義。話によると学生なども出品してる人がいるらしくて

受け

入れられる作品を作れるかどうかがある意味で1つのラインになっているようだ。

実際にここでの功績が認められてプロの芸術家になった人もいるとアリシアは言った。

「カイトもそのうちここに出品してみたらいいかなって思ってた。あなた自身がこれなら自信を持てるって思える絵が書けたらやってみたらどうかしら？」

どうやら僕のためにこういった場もあるというのを教えてくれたようだ。

「うん・・・もつと自分の絵を固められた時、ここに挑戦してみる。ありがとう、アリシア」

「あらあらトトうふふト」

それから僕達、2人はアクセサリーショップへとやってくる。

「これアリシアに似合いそうだな？スノーホワイトだし、通り名が」

僕がそう言ってアリシアに差出したのは雪の結晶を模したガラス細工が細かいアクセサ

リーで彼女の方も何かを見つけてきたらしく、それを僕に差し出す。

「ほら、これ綺麗じゃないかしら？雪の結晶のガラス細工」

「あつ」

2人して同じガラス細工のアクセサリーを持ってきたようで同時に吹き出してし

まった。

「はっはっは♪それじゃこれはアリシアのプレゼントに」

「それじゃこっちはカイトへのプレゼントに」

こうして僕とアリシアはお揃いの雪の結晶のペンダントを買った。

その後、向かったのはアリシアや晃達が利用しているイタリア料理店『ウイネバー』でカルパッチョ専門店らしいけどイタリア料理は一通りそろっているらしい。

「このピザはチーズがとても美味しいの。それにカルパッチョも絶品なのよ〜」

出されたピザはアリシアが好きと言っていた5種類のチーズをたっぷり使った贅沢

ピザとカルパッチョは朝仕入れたばかりの牛肉を使っているモノみたいだ。

「オリーブオイルとレモン、塩のシンプルな味付けだけど素材の味が素直に楽しめるね」

「ふふ、気に入ってくれた？」

「もちろん」

それから談笑を楽しみながらアリシアから今までの水先案内人の話だとか灯里ちゃん

の想い出話などいろいろ知らなかった事を聞く事が出来た。

また2人で歩いていると僕の足元にボールが飛んできて軽くトラップで手に持った。

「お兄ちゃん〜！ボール蹴って〜！」

どうやら遊んでいた子供の蹴ったボールがホームランしてこっちに飛んできたらしい。

「よ〜し、いくぞ〜？」

ゴールから20mちよつとか・・・上手くいけば入るかな？

僕はボールを足元に置いて少し距離をおいてから一呼吸おいて助走して足を振り被る。

「そらっ！」

立ち足はややボールから遠い位置に置いてボールの中心を足のインサイドでかかとか

らぬく感じで蹴り、インサイドでアウト回転をかける感じで押し出す感じで蹴った。

想った通りにボールが一瞬、右にぶれてそこから急激に左に曲がってゴールに突き刺さる。

「よっし！久しぶりにやってみたけど上手かったー！」

思わずガッツポーズを決めてしまったが気付いてすぐに引つ込めた。ちなみにあれは

サッカーの無回転フリーキックって言ってボールがぶれるように落ちたり、さつきみ

たいな不規則な曲がり方をする魔球って言われてるキックだったりするんだ。

「す、すっげえ〜！」

子供から声援が聞こえて軽く手をふってその場を後にする。たぶんあのまま行くところ  
子

供達に捕まって買い物だとか、そんな場合はでなくなる気がする。

「以外とカイトって運動神経いいのね。インドア派かと思っただわ（笑）」

「あのね・・・こう見えても体育は美術同様に最高点とってたんだよ。」

可笑しそうに笑いを堪えているアリシアにちよつとぶすくれ顔の僕がいた。だけど  
そん

な中、さつきサッカーをしていた子供達に捕まって一緒にサッカーをしようと言われ  
て

困っていた僕だったんだけど結局は・・・。

「カイト、パス！」

僕とアリシアも子供達に入って一緒にサッカーを始めてしまった。アリシアが面白  
そう

だから遊んでいきましよう♪とノリノリで試合に参加したのである。

「ほら、上がれ、上がれ〜！」



他の子ども達を上がらせて大きくセンターリングを上げてそれを子供がヘディングしただけ

ど打ち上げてしまい、悔しがっているがまた僕にボールを蹴って要求してくる。

「カイト、カイト〜！パス、パス♪」

すでにアリシアもかなり楽しんでしまっているようでお望みどおりにアリシアに合わせ

て柔らかい山なりのトラップし易いパスを出したんだけど次の瞬間、驚いてしまった。

「それっー！」

なんとあの白き妖精と呼ばれスマイルが特徴的であまり活発というイメージでもないア

リシアが飛び上がって見事なヘディングシュートをゴールを決めた。

ゴールに入ったのを見ると嬉しそうに飛び上がって僕に駆け寄るとハイタッチを交す。

「やったわ、ナイスパスよ、カイト♪」

「まさかヘディングシュートとは驚いたよ。結構、お転婆？アリシアって？」

「わたしだって子供の頃は晃ちゃん色々、遊びに歩き回ってたのよ？楽しいわね♪」

それからアリシアと2人で思う存分、サッカーを楽しんでいた。あれ？買ひ物は？  
気付いた頃には夕方になっていて子供達もそれぞれの家に戻って行った。

「ついつい遊び過ぎちゃったわね。ちよつと疲れたわ」

アリシアと海側のベンチに座ってカフェで買ってきたアイスコーヒーを2人で飲んだ。

「それにしてもアリシアって色々な場所知ってるね。色々、今日は知らなかった名所  
を見られて楽しかったよ。でも君って何でも楽しんじゃうんだな」

いきなりサッカーをやり始めたり、今日、回った店でも色々な裏メニューだったり、  
隠れた名店だったり、とても情報通なんだと思う。

でもどつちかというを買ひ物というよりは女の子と遊びに出掛けただけだよな。

あれだよ、皆が憧れる水の三大妖精と2人で遊べるなんてのもかなりレアな体験  
なのかもしれないけれど変な話、『普通の女の子のアリシア』を見た気がする。

「ふふつ、楽しい事は何でも楽しんでしまうのがコツなのよ」

それから僕はアリシアに誘われて彼女の秘密の場所に連れて行ってもらう事になっ  
た。

しばらく歩いて辿り着いた場所は街のはずれにある森林でそこから多少なりと整備  
さ

れた道を歩いて行くと開けた場所へとやってきた。

「ここは……」

その場所は海へと繋がっていて小さな浜辺がそこにはあった。

「あまり人も寄り付かない場所だから秘密の場所なのよ？ここを教えてくれた人から話を聞いたけれど昔は漁に出ていた船が停泊する休憩ポイントだったんですって」

アリシアに手を引かれて海へと近づくと徐に彼女が靴を脱いで素足になりだした。「最後はここーもうちよつと遊びましよう♪ほら、カイトも靴脱いで」

「う、うん。って……あんまり引つ張らないでアリシア、バランスが……あっ!？」

「きゃっ!？」

案の定、バランスを崩した僕はアリシアを巻き込む様な形で水に倒れ込んでしまった。

「痛っう……アリシア、大丈夫……なっ?!」

「え……ええ、ごめんなさい……とつとはしやぎ過ぎちゃったわね」

「こ……これ、着て!!はやく!!」

僕は自分が羽織っていたシャツをアリシアに押し付けた。すぐさま後ろを向く。

「え?どうして?」

「あの……その……服が……透けてる……(照)」

「えっ……?きやつ!」

そんな声が聞こえる。はつきり言うて見てしまった。何でこんな状況に?!いや、水辺でふざけたのが原因だけど頭にさっきの光景が焼き付いて顔がさらに赤くなる。

「も・・もう、大丈夫よ。カイト」

声に振り返ると僕のシャツを羽織ってとりあずは隠してくれたようで安心する。

「えいつ!」

「わぶつ!?!……ぺっ!ぺっ……、しよっぱ!?!」

いきなり顔に水をかけられて啞然とする僕にさらにアリシアが追撃をかけてきた。

「それじゃ続き!もうちよつと遊ぶって言ったでしょ♪」

「っていうか、それだと結局、またびしよ濡れじゃないの、アリシ・・ぶはつ!」

しかし間髪入れずに水攻めをされるのにちよつと負けず嫌いなところが出たのか逆に

僕も手で海の水をすくうとそのままアリシアに水攻めをし返した。

「きやつ!やったわね、カイト!」

「アリシアが最初にやったんだろ?僕のはお返しだよ!」

「それじゃわたしもお返し!それ!」

「やったな、こつちだつてお返しだ!そりや!!」

僕達はそれから童心にかえって水かけ遊びを楽しんでしばらくすると2人して浜辺に

寝転がって荒れた息を整えていた。今日も星がとても澄んで綺麗に見える。

「ははっ・・・確かに何でも楽しんでもしまふ達人だよ、アリシアアッて」

「うふふ♪」

今日はとても楽しかった。いろいろな発見もあつたし、街の人との交流もあつた。それにこんな風に女の子と大騒ぎしてはしゃいだのも初めてで案外、初めて尽くしだ。

静かな月夜、押し寄せるさざ波の音、2人の呼吸の音だけが聞こえる静かな世界。

「でもカイト」

「んっ? 何、アリシアア?」

お互いに顔を向けて見つめ合う。アリシアが口を開いた。

「これからもっといろんな楽しい事が待ってるのよ? そう思うと小さなことでも楽しまないとい損した気分になっちゃうの、それがわたし流の楽しむコツよ?」

どんな小さな事も・・・か。もしかして僕って今まで見逃してたのかな、そこにあつたはずの楽しい事とか、大切なモノとか、焦り過ぎてて視野が狭くなつてたかも。

「僕も見つけていきたいな、楽しい事とか、素敵な事とか。そうすれば・・・」

「色」についてもその色が絵に与える素敵な世界、楽しさを与えられるような色を扱

えるようにもなるのかもしれない。

アリシアみたいに些細な楽しい事でも見つけて楽しめるようになったらどんな表現で

も絵の中に描く事が出来る気がする・・・そして『あの色』とも向き合えるだろうか。

「カイト？」

「うんうん、なんでもない。なんでも・・・」

そういつて空を見上げる僕にアリシアはこう言ってくる。

「カイト、何か悩んだり、苦しい事があつたらまた2人で楽しい事、探しましょう？」

「アリシア・・・」

なんだかアリシアに一瞬、考えた暗い部分を見透かされたような、そんな言葉だった。

「うん・・・そうだね」

そうだ・・・こんな楽しい一日を過ごさせてくれたのにまだ言っていなかった。

「アリシア」

「・・・なに？」

「ありがとう」

「あらあら、どうしましたまして。うふふ♪」

こうして僕はアリシアと楽しい一日を過ごす事が出来た。

そうだ・・今度からもつと街を見てみよう・・この街にはまだまだ楽しい事とか  
素敵なものがいっぱいある・・そしたらアリシアみたいな達人になれるかな？

EXTRA STORY その真実の蒼に・・・

夢を見ていた。そこは海の中でただその中を水底へ沈んでいくだけの夢。

だけどとても落ち着いた、どこまでも全てを包む青色、頭上には太陽の光が差し込んで海の中を幻想的にそして綺麗に照らしている。

そして夢の最後はいつも同じ、裏から蒼い光が放出されてそれに包まれて・・・。

「・・・んっ・・・・・・・・・・朝、か・・・？」

夢から覚めると太陽の日差しが差し込み、いつもの清々しい朝を迎えていた。

ただどうにもすすきりというわけでもない感じもする、一体、あの夢は何なんだろう？

「んんっ・・・おはようございますっ、カイトさんっ」



「おはよう、灯里ちゃん」

挨拶を交わした僕はふと海を見ると突如として『眼』が勝手に発動して海の色が変わる。

「(な・・なんだ？海が光ってる？蛍光色みたいになんなんだ、これ?)」

だけどその光もいつの間にか消えてしまつて『眼』もまた戻っていた。

「カイトさん？どうしたんですか？」

「・・うんうん、なんでもない。さあ、朝ご飯にしようか」

「はひっ！」

・ ・ ・

今、僕は以前にアリシアに教えて貰った秘密の入り江の画を描いていた。白い砂浜と何十年も風雨にさらされて形状がいびつになった岩山、そしてそこから広がる海と被写体として今まで見た景色でも1、2に入る景色だった。

「あとは海の配色を決めるだけだな。さて『眼』で配色でも見てみようかな」

そうして『眼』を使つただけだけどいつもとは違った。海の蒼だけが配色が読めずに

またも発光色として映る。さらには空も見上げたら空の蒼までも発光色に変わって  
いて少しその色にあてられたのかめまいが襲った。

「この強い発光色を見続けてたら頭痛が酷くなる・『眼』を切ろう」

だが僕の意志に反して『眼』は止まらずそのまま蒼の発光色を見せ続けてくる。

「頭が痛い・・・なんだ、この『眼』はどうしたっていうんだ・・・？」

あまりの痛みに意識が段々と薄れてきてそこで僕の目の前は真つ暗になった。

・  
・  
・  
・

それからしばらくして僕は身体に冷たいモノが触れる感触に起こされて意識を取り  
戻す。

だが起き上がってみるとそこは前に夢で見たどこまでもまっ白な世界。

「でもこの手に触れている感触・・・水か？見えないけど感触はある」

不思議な感覚だった。見えないのに確かに触れる感触、冷たさ、それは間違いなく水  
で試しになめてみると塩分を含んでいてどうやらこれは海水のようだ。

「これは夢なのか？でも五感がリアル過ぎる・・・」

そして僕はふと視線を感じて振り返る。

「君は……」

そこに立っていたのは『あの女の子』だ。だけど僕はその時、何か違和感を感じた。

彼女の眼は『ピジョンブラッド』ではなく、『ブルーサファイア』、蒼い色に染ま

っていて僕が唾然としてみると彼女が口を開いた。

「あなたが会ったのは『赤のフロマ』。あなたに一番、近い色。わたしは『蒼のフロマ』

……『眼』があなたを認めたから出てくるのが出来たの」

「『眼』が認めた？ どういう事なんだ」

「赤のフロマが言ったでしょ？ 色んな世界を綺麗に映す眼だつて、あなたが望んで世界

を見ようとしているから『眼』もあなたを宿主と認めて『真実の色』を見せるように

なったの……早く見つけて『真実の蒼』を。『蒼の意味』を」

「ちよつと待つて！ 『真実の蒼』つて、『蒼の意味』つて何なんだ？」

（今のあなたの『眼』なら世界に色をあ……る……う……）

だがその女の子『蒼のフロマ』は粒子になつて消えていった。

一体、どういう事なんだ？ 『眼』が僕を認めた？ 『真実の蒼』と『蒼の意味』を見つ

け

て？ 謎が深まるばかりで僕はその場に座り込んで思案を巡らせる。

「前、赤のフロマがこの世界から色が消えたって言っていた。そもそも色が消えたって理由が謎だけど・・・蒼のフロマの言葉を取れば『蒼色』を見つけてから判断すると見つければこの世界に『蒼』が戻る・・・って考えればいいんだよな？」

だが問題はもうやってそれを見つけるかだ。『蒼の意味』・・・鍵はこれなのかな？

「蒼の意味・・・？蒼から連想されるイメージを描えればいいのか・・・」

僕も色彩からイメージし、連想したモノから色の概要を勉強した事はある。

蒼は基本的に海や水のイメージから『希望』『冷静』という意味を伴う事、そしてもう一つ『平和』を現し、平和団体のシンボルカラーにもなっていた。

「蒼からの連想、空・海・水・水か、古代ギリシャでは『万物の根源（アルケー）は水』」

と言われるように生命の存在に不可欠なモノ、前に見た東洋の書物だと命は水によつて養われ、水がなければ命は消えるって論説もあったつけ

案外、『蒼』というのは暗いイメージ、霊的なモノ、気持ちが悪くなる色など思われがちなのだが実際は逆、生み出すというイメージを与えるモノが多いんだよな。

「色が無くなったならここに色をつければ戻るのか？いや・・・この広範囲にどうやって色なんてつけ・・・（さてよ、あの子の最後の言葉）」

僕の今の『眼』なら世界に色を・・・後の言葉は擦れて聞こえなかったけれど今の

僕の『眼』には世界の色を『視る』以外にも何か力があるって事なのか？

「『眼』よ、お前に鍵があるなら答えてくれ」

そうして『眼』を発動させる。すると僕の足元、そして上空、そこに現実の世界で見たのと同じ発光色の蒼が現れて足元を見ると一面が蒼、そして上も蒼に所々で空白のように色が抜けている部分が見えてそこで理解した。

「この『眼』を使っている時だけ色が現れるのか。現実だと頭痛がしたけど今はまるで痛みがない・・・んっ・・・『眼』の色が！」

前は白だったところに蒼の配色が現れ始めた。発光色だったが水のように僕の姿を映

し、その水面に手を触れた途端に発光色がさらに輝きを増して光に包まれていく。

「！」

気付いた時には僕は海の中で・・・そう丁度、夢のような状態になっていた。

そして見える光景も発光色の蒼から本当に『海の蒼』を取り戻して上を見上げるとそこにはやはり本来の『空の蒼』を取り戻した空が広がっている。

「そうか、この『眼』のもう一つの力ってこの世界を色で染める力だったんだ」

そして気付いてみると僕の周りに何かがいる事に気づいてみてみると段々と姿が現出

されて見える様になった姿はイルカで僕の周りを自由に楽しそうに泳いでいた。

どうやら海が色を取り戻した事でここで生きる生き物達も本来の姿を取り戻した様だ。

「んっ？色が流れてる・・・？どこに・・・」

『眼』が見せる色の流れがどこかに集まっていく。それは海の底で本当に小さな光が

見えて僕はそれに引き寄せられるように底へと泳ぎ始める。

「すごい・・・いろんな命が生まれていく。これが母なる海・・・」

潜っていく間にもいろいろな海の生物達が生まれ、そして世界へと飛び出していくシーンを見ていたらさっきのイルカが僕の横にきて背びれを差出してくる。

「どうやら掴まれといっている・・・いや、何となくそう思うだけだけどね？」

「頼むよ、イルカ君」

そうして背びれに掴まるとイルカは僕を引っ張ったまま海の底へと泳ぎを進める。

「母なる海・・・その世界を創り出すのは『蒼』。そうか、彼女の言った『意味』って」

段々と近づいてくるその光を見つめながら自分なりの『意味』の答えに辿り着いた。

辿り着いて僕はその小さな光を両手ですくって『真実の蒼』に心奪われる。

「蒼・・・命を育む色・・・このアクアを造る色・・・綺麗だ・・・凄く」

そして僕が顔を上げると目の前にはさっきの女の子がいたんだけど彼女の髪が

シヨ一

トヘアーからロングに変わって髪の色も瞳に相對して蒼に変化していた。

その姿はとても綺麗で彼女の姿にも目を奪われていた、まさに女神がそこにはいた。

「ありがとう・・・わたしを見つけてくれて。この世界に『蒼』が戻ったよ」

「君が色、そのものなんだね。この『眼』はフロマ達に色を与える力がある、彼女が

頼んでいたのはこういう事だったんだよね、蒼のフロマ？」

「うん・・・でもまだたくさんの子が待つてる。今度は皆を描いてあげて・・・昔の

ように・・・一人で置いていかないで・・・」

そして彼女からまた謎の話が出てくる。

一人で置いていく？昔のように・・・って前にもこんな事があつたって事なのかな？

「これからお兄さんに『世界の蒼』達は自分の本当の色を見せてくれるようになるよ

。お兄さん・・・今描いている絵、出来たらわたしに見せてね？」

「・・・うん、わかった。分からない事も多いけど君が笑顔になる絵を描き上げるよ」

「うん・・・♪じゃあね、お兄さん。そろそろ夢から覚め・・・」

「・・・さ・・・ん・・・カイ・・・さん・・・カイトさくん！起きてくださいい〜！」

僕はそこで目が覚めた。

「・・・灯里・・・ちゃん？どうしたの、こんなところまで」

これには灯里ちゃんが今まで見たことがないような怒った顔で叱りつけてくる。

「どうしたのじゃないですよ！カイトさんがいつになつても帰つてこないからアリシ

アさんと一緒に探し回つてたんですよ？こんな暗くなつてるのに！」

辺りを見回すとすでに夕日も傾きかけて海を見ると夕日と夜が混じりあつた何とも

幻

想的でロマンチックな風景画が広がっていた。

「感じる・・・『眼』にあの子の存在を・・・夢じゃなかったんだ」

何というかもう感覚がもう1つあるというか、なんと説明していいかわかりにくい

な。

「早く帰りましょう？カイトさん」

「うん、そうだね。アリシアにも心配かけちゃったようだし」

僕は道具を片づけてもう一度、海を見た。そしてその光景をしつかりと焼き付けたん

だ。



「ふう．．．、まさかアリシアがあんなに説教キャラだとは．．．」

灯里ちゃんに聞いても怒ったり、叱ったりしたのを見たことがないと言っていたのに、あれから数十分、みっちり静かな口調で諭された。あれはあれで怖い、うん。

「さて．．．清書はしたし、色をつけていくかな．．．」

そうして僕は『眼』の力を発動し、その絵に色をつけていった。

一方．．．灯里はというと。

「アリシアさんの特製生クリームのセココア、喜ぶかな？」

あれからアリシアさんがカイトさんがリラックスできるようにと糖分補給よ♪と言つて

これを持っていくように渡されました。

でもアリシアさんがあんなに怒るなんて始めてみたかも。凄く心配してたんですね。

「（集中してると悪いし、ちよつと様子を見てみよう．．．）」

わたしはドアの隙間から中をのぞいてみました。

「あっ・・・カイトさん、真剣な顔で描いてます。ああいうところカッコいいな」

1つの事にあんなに一生懸命になってやっている姿はプロの画家みたいですよね？

「・・・えっ？」

でもわたしは1つ、違和感というか、不思議なモノを見たんです。

いつものカイトさんの眼と色というか雰囲気違って吸い込まれそうな蒼色でした。

「(なんで眼の色が・・・?)」

その後、ココアを届けにいつてこつそりと見つめた瞳はいつものカイトさんの眼だったんですけど・・・アレは一体、なんだったんでしょう？

それから僕の画には大きな変化が生まれた。

『蒼』のフロマとの出会いから僕の『眼』は世界にある青色を理解させる能力が前よ

り格段に強くなっていて僕の描く絵に使われる蒼は自分でも驚くほどに本物に近い

り

アルな色彩を表現できるようになっていて逆に全体のバランスを崩しかねない程度だった。

『真実の色』を知る事でそれにもっとも近い配色を扱えるようになるって事か」

だが逆に難しい事でもあった。『蒼』の表現が格段に良くなりすぎて他の色が食われてしまい、今まで以上に色の表現に気を使うようになっていた。

だけどそのおかげで前より絵自身、前の軽いモノから深みが少しついた気がする。

「でも彼女と前に会った子はそれぞれ別のフロマだっという事はまだ他にも別色のフロマがあつたまっ白な世界で見つけるのを待っているって事か・・・」

つまり最初に出会った『赤のフロマ』が言っていた「この世界に色を取り戻して」とい

う願いは自分達を見つけてあの世界に『色』として戻して欲しい・・・そう解釈できる。

どうすれば彼女達に会えるのかは分からないけれど僕が成長を実感できた時に『蒼の

フ

ロマとも出会えた。

という事は僕が成長する事で彼女達の『色』を視る資格を得られるって事なのかも。

「まずはこの絵を完成させよう。待ってて『蒼のフロマ』、君の絵を見せてあげるから」

そういつて『眼』を手で覆う様に中の『蒼のフロマ』に語りかける。

僕の頭の中に投影される彼女の顔にはかすかだけれど笑みが浮かんでいたんだ。

絵に真剣に向き合っている彼の姿を遠くの建物の上から見つめるもう一人のフロマ。

『赤のフロマ』は前より穏やかな表情が現れてきて同胞に語りかける。

「良かったね、『蒼のフロマ』。お兄ちゃん、ありがとう」

そう呟いた『赤のフロマ』。刹那、彼女の姿は風と共にその場から消えていた。

彼女もいつかあの世界で『色』として蘇る事が出来るのか・・・それは青年の描く物語次第・・・さて青年とアクア、そしてフロマの紡ぐ物語はまだ始まったばかりだ。

## 第8話 その小さな歌い手に……

最近、僕が街にでて絵を描く際に絵描き仲間が増えた。それは誰かというところ……。

「カイトさん、こんな感じでどうでしょう」

「うん、いいんじゃないかな。この部分だけ少しぼかし入れた方がいいかも」

「了解です」

僕の絵描き仲間のアリスちゃんが加わった。とは言っても学校帰りの少しの時間で少しずつ進めながら自分が決めた画材を一生懸命に描いていた。

「カイトさんみたいな、あんな幻想的な絵は無理ですけど綺麗に描きたいです」

「大丈夫、アリスちゃんが感じたままの光景を自然に描けばいい絵になるよ。実際にすごくいい感じに仕上がってると思う、がんばろう、アリスちゃん」

「は、はい（照）」

密かに聞きだしたんだけど絵を描いている理由はこれをアテナにあげたいらしい。

「んっ？この声は……」

ふと聞こえた声……というより歌声が聞こえて座っていた橋から奥の水路を見てみると噂をしていたアテナが客を乗せてゴンドラを漕いで通過するところだった。

「やつぱりアテナの謳はどこにいても存在感がある強くも優しい音色だよな〜」

「はい、アテナ先輩の謳はアクアでつかい一番ですから」

普段はツンとした態度のアリスちゃんだけどアテナの事については胸を張って言い切った。

「それじゃもう少し描いたら今日はおしまいにしようか」

「はい」

それから僕達は絵に集中した……してたはずだったんだけど――。

「カイトさん、カイトさん。……でつかいぐっすりです」

あれからカイトさんがこっくり、こっくりと船をこいでたけれどそのまま寝てしまったみたいで顔を下に向けながら規則正しい寝息を立てていました。

「そういうえば最近、遅くまで絵を描いてるって言ってましたね。それなのにわたしの絵描きに付き合ってくれて人が良すぎます、カイトさん」

完全に寝てしまっているのか、そのまま体勢がゆっくりと倒れそうになってきたのでそれを支えてその流れで自分の膝の上に寝かせてしまいました。

「カイトさん、ぐっすり寝てますね。お疲れのようですよ。少し寝かせてあげましょう」  
「まあ〜あ〜」

そういうしながら膝の上で眠るカイトさんの前髪をてぐしで直しながらわたしも吹き抜

ける風に靡く髪を手で抑えながらそれでもとても穏やかな気分でした。

ふとカイトさんが書き途中だった絵があつたので手に取ってみるとまだ鉛筆だけ

の線なのに柔らかいタッチが温かみを感じてこれだけでも素敵だなって思います。

「つて・・・藍華先輩に聞かれたら、恥ずかしい台詞禁止！つて言われそうですね」

「まあ〜！まあ〜！」

「しい〜・・・まあ社長、カイトさんが起きちゃいますからでつかい、しい〜・・・」  
「まあ〜・・・」

注意するとなちゃんともまあ社長は静かにわたしの隣に来てお昼寝を始めました。最近

はいい子にしてるし、1人でお布団に登れるようになりました。

前は昇れなくてアリア社長のもちもちぼんぼんで遊べなくて残念そうでしたけどでも

あれって実際はでっかい痛いかもです、噛みつかれてますし・・・。

「んんっ・・・くっ・・・や・め・」

「カイトさん？」

すると膝の上で寝ていたカイトさんがいきなり苦しみ始めたんです。何だかとても苦

しそうな、だけどその表情には悲しそうな感じも混ざっていても悪い夢を見ていてそれに驚されているのはすぐにわかったんです。

「ど・・・どうしよう・・・っ！ええつと・・・」

そんな時、ふと昔の事を思い出しました。わたしがオレンジプラネットに来て最初の頃、慣れなくて怖い夢を見てた時にアテナ先輩が子守唄をそつと歌っていてくれた時があつてその時は不思議といい夢が見れたんです。

「アテナ先輩みたいには無理かもしれないけど少しは良くなるかも」

目を閉じて少し深呼吸をすると覚えて間もない曲だけどカイトさんが少しでも楽にな

ればと思いつつ前にアテナ先輩が歌ってくれた唄を歌う事にしました。



それはいつも見る悪夢。最近は見なくなっていたと思っていたけれどやはりこの悪夢

からは逃れられないらしい。一面が『アノ色』で染められている。

もちろん、それを色として認識しているわけじゃない、ただその色は僕の眼には異質な空間として眼に見えてしまいそれに包まれる感覚は吐き気すらする。

「気持ち悪い・・・気持ち悪い・・・早く・・・早く覚めてくれ・・・」

ただ何も出来ずにその色の空間に漂うだけ。苦痛、悲壮感、負の感覚しか生まれてこない。

「・・・♪・・・♪」

その時、僕の耳に今まで聞いたことがない音が流れ込んできた。その方向を振り向くと夕日のような温かいオレンジ色の光がさしてきてその音、いや声はそこからだった。

「・・・あたたかい・・・」

僕は全てをその光にゆだねて目を閉じる。そして段々と意識が浮かび上がってきたんだ。

「（……………これ……歌……？一体、だれの……？）」

眼の力が働いているのかさっきの残像がまだ残る中、顔を上げてみるとそこにいたのは夕日に照らされた歌姫の姿……もといアリスちゃんの歌う姿だった。

その歌声の色は本当に夕日の光そのもの。辺り一面をその色で神々しく照らし出して

彼女の緑翠玉（エメラルドグリーン）の髪がさらに際立って見える。

「アリス……ちゃん？」

「……………あつ、起きましたか、カイトさん。でっかい悪い夢見てました？」

「うん……でもいつもの事……そう、いつもの事だった……」

前はこの夢を見るのが当たり前だった。いつも目覚めが悪くて最近はこのアクアに来

て視なくなつていたけれどまたみる事になるとは思わなかつた。

いや、今の方が異常なのかも。見るのが当たり前だったのが日常だったから。

「でも・・・歌が聞こえた・・・アリスちゃんが歌つてくれてたんだ、ありがと」

「何でお礼を言うんですか？ そんなに大したことなんてしてないです」

「うんうん、悪い夢から引き揚げてくれたから。少しは目覚めが良くなった、でも」

さっきの光景を思い出す。夕日の光を持ったアリスちゃんの歌声と彼女の姿。

「アリスちゃんって歌が上手いんだね。さすがアテナの一番弟子って感じかな」

だがそんな僕の言葉にアリスちゃんは顔を背けてぶつきらぼうに言った。

「わたしの歌なんて・・・でっかい下手ですから・・・」

「そうかな・・・？ 僕は君の歌で救われた気がするし、だからありがと・・・かな？」

「カイトさん、それは理由が変です」

「ははっ、そうかもね。あつと・・・そろそろ時間も時間だし今日は帰ろうか」

夕日も沈み始めていてアリスちゃんの下宿しているオレンジプラネットには門限もあ

るようだし、破ると色々と面倒そうなので今日はここら辺できり上げる事にした。

「あつ、おはよう、カイト〜」

「うん？ ああ、アテナ、おはよう」

次の日、カフェテリアで昼食を取っていたらやってきたのはアテナ。茶葉を買いに  
来ていた様でアリシアに教えて貰った美味しい茶葉屋の袋を抱えている。

それからまだ次の予約まで時間があるという事で2人でお茶をしながら昼食になっ  
た。

「ねえ、カイト。昨日、アリスちゃんとお絵かきしてたでしょ？」

「うん、してたけど」

「何かアリスちゃんが喜ぶような事ってあった？ 帰ってきてすぐ嬉しそうだったか  
ら」

話しによると帰ってきたアリスちゃんは終始嬉しそうに鼻歌を歌いながら自分が  
描いた絵を眺めて就寝時間までずっと絵を描いていたという。

「あんなに嬉しそうなアリスちゃん、初めてで。どうしたのかな〜って」

確かに別れる前のアリスちゃんは微笑みって感じだけど笑ってたような気がする。

「うん〜……アリスちゃんが歌を唄ってくれたからそれを褒めたくらいかな？」

「アリスちゃんか歌を？あの子、人前で歌を唄った事なんて一度もないのに」

「いや、人前というか僕が斃されてたから子守唄代わりに歌ってくれてたみたいで

僕もはつきりと全て聞いたんじゃないんだ。でも少しでもいい歌だったよ」

寝起きで寝ぼけていたのもあるけどそれでもアリスちゃんの歌声はとて澄んでいて

アテナのような七色の輝きではないけれど彼女自身の優しさが現れたような温かい  
オ

レンジ色だったのは今でもしつかりと目にやきついていた。

「もしかしてカイトに褒められたのが嬉しかったのかしら？」

「僕に？音楽なんかまるで知識がない僕に褒められてもあんまり嬉しくないと思うけど」

「・・・カイトつてにぶにぶさんなのね」

「ごめん、そのにぶいという部分についてはアテナに言われたくないよ・・・」

そんな談笑をしながらその日は過ぎていった。

・  
・  
・

「カイトさんいるかな・・・あれ？この音・・・」

わたしがいつもの場所へやってくるのと何かオカリナの音が聞こえて出てみるとそこで

カイトさんが座りながらこの間わたしが歌った歌を拙いながら吹いていました。

♪~~~~♪~~~~♪~~~~あつ、アリスちゃん、いらつしやい」

「はい、今日もお願いします。・・・でもカイトさん、オカリナがでつかい上手です」

隣に座るとカイトさんの描いている絵がこの間とは違って・・・これ、わたし？

「分かる？この間のアリスちゃんをイメージして描いてみたんだ。一応、題名も決まっ

て

てね、黄昏の姫君（オレンジ・プリンセス）っていうんだ」

絵に描かれていたのはドレスを着たロングヘアーの少女が歌を唄っていて背景は夕

日

とその色に染まる海をバックに夕日の中を舞い、旋律を奏でている絵でした。

「これがわたし・・・こんな綺麗な色、わたしの歌になんかあるはずないです」

「なんでそう思うの？」

「わたしの歌はアテナ先輩みたいにすぐくないし、先輩みたいに歌う目的もないですし

歌う意味がないわたしの歌になんか・・・こんなイメージなんてないです」

アテナ先輩はお客さんに歌を唄う目的があつて頑張つてるからあんなに凄い歌が歌える

けれどわたしには歌う目的がない。

何かのために歌う理由もないし、それを見出す事もわたしには出来ていなかった。

「前にアテナがいったた琴なんだけどね」

隣に座つて水筒にいれたコーヒーをついで渡すとゆつくりと話し始めました。

「前にアテナにきいたことがあつたんだ、なんのためにアテナつて歌を唄うの？つて」

そしたら彼女はこう言った。

（歌うことに理由なんてないし・・・。謳は誰かに聴いてもらうものだから。だから歌うの）

「誰かが聴いていてくれる、だからアテナは歌つてるんだ。自分の一番近くにいつも

自分の歌を聞いていてくれる人がいるから、だから上手くなりたいんだつてね」

「それって・・・」

「そう、アリスちゃんの事。アテナにとつてはアリスちゃんが強いて言うなら目的だらうね」

聞いていてくれる人へ謳うのが謳う理由。

「こんな事、言うのは生意気かもしれないけれど。僕もそんな気持ちで今は描けてるんだ。絵を見て笑ってくれる灯里ちゃんやアリシアや僕の絵を上手って言ってくれるアリスちゃん達にまたそんな顔になってほしくて。それが今の僕の絵を描く理由」  
「今のカイトさん・・・ですか？」

「うん。前の僕は描く理由が無くてただそれ続けていただけだったんだけどこの星に来て、皆と出会えて初めて描きたいと思える理由が出来たんだ。今の僕なら思えるのはちよつと踏み出すだけで霞んでいた景色が今までと違う素敵なモノになると思う」  
「そういつて絵に触れるカイトさんの目が前にも見たような少し悲しげな瞳ながらそれだ」

も強さもうかがえる眼で、だけど絵だけを見つめる真つ直ぐな眼差しでした。

「アリスちゃんも本当は歌が好きなんだと思うよ。じゃなきや、誰かの歌を聞いて上手だなとか、素敵だななんて思えない。そう思うつて事はアリスちゃんの中にはそれが好きだつて気持ちがある。ただそれにまだ気づけていないだけで」

「わたしの気持ち・・・？」

「すぐには無理かもしれないけれど少しずつ歌と触れ合ってみるといいと思うよ。気が向いた時に口ずさむくらいでもいいと思う。僕が今、絵が自分の一部になってこれたようにアリスちゃんが歌を自分の一部のように思えるように向き合えばいいと思う」



わたしにも想えるようになる時が来るのかなと思いました。ただ無理だと決めつけてい

ただけでわたしは歌に触れる事もしなかつたけれど今からでも出来るのかな？

「これは灯里ちゃんからの受け売りだけど何時でも何時でも何度でもチャレンジしたい  
って思つた時がその人にとつての、まっ白なスタートなんですって」

「まっ白なスタート・・・今、わたしが思つた事がでつかいまっ白なスタートですか？」

「うん、あの時、アリスちゃんが謳つてくれた歌、とても素敵で歌声だった。だから  
もうアリスちゃんはスタート出来てるんだよ、気付いていなかっただけで」

そういつてカイトさんがわたしの頭に手を置いて優しく撫で始めました。

「わたし・・・この絵みたいなの、黄昏の姫君になれるでしょうか・・・？」

「絶対なれる。君の歌声は・・・こんなに綺麗な色をしてるんだ。だから聴かせて、  
君の歌を。少なくとも僕はアリスちゃんの歌をずっと聴くよ？」

なんででしょう？何故か恥ずかしくなつて苦し紛れに出た言葉は。

「カイトさん、恥ずかしい台詞、でつかい禁止です！」

「ええっ?!」

そしてしばらくしてアリスちゃんが恥ずかしそうにこんなお願いをしてきた。

「カイトさんが一緒にオカリナで演奏してくれるなら・・・わたしも歌います」



## 第9話 そのいちばん新しい思い出に……

「ARIAカンパニーの彩色パリーナの設計図を考えてほしい？」

「はひっ！」

その日、僕は灯里ちゃんが頼みたい事があるというので広場で街合わせて喫茶店でお茶をしながら一体、どういった内容なのかを聞いていた。

「というかパリーナって何なの？」

「パリーナというのはですね、ゴンドラを繋ぎとめる役目があるんですけれどその他のにもこれを何本も集めたプリコラには番号がふられていて自分の位置を知る目印にもなるんですよ！」

「ああ……そういえばアリスシアに夜の散歩に連れて行ってもらった時に見た事あるな。物凄いデカイ木の杭の集まりがそこかしこにあったよ」

この他にも店や個人の家には彩色パリーナという色やデザインが一つ一つ異なる

パリーナが立てられているのだとか。

しかしそこで灯里ちゃんはA R I Aカンパニーにはそれが無い事に気が付いた。

「アリシアさんに聞いてみたら入社した当時から無かったから気にした事もなかったらしくて。そしたらわたしにそのデザインを描いてみないかって」

「(アリシア・・・少しは疑問に持った方がいいんじゃないの・・・?)」

僕はそんな事を心に想いながらも灯里ちゃんの話に耳を傾ける。

「出来れば本業のカイトさんにも手伝ってもらいたいです。駄目・・・ですか?」

いえ・・・そんな目で見られて駄目といえる男はいないと思うんですが・・・。な

んか灯里ちゃんって無防備過ぎるといえるか、心臓に悪い事たまにするからな。

「わかった、僕も出来るだけ手伝うよ。メインは灯里ちゃんが決めなきゃ駄目だよ?」

「はひっ♪ありがとうございます〜!」

こうして僕は灯里ちゃんと一緒にA R I Aカンパニーの彩色パリーナのデザインを考える事になったわけなんだけれどこういった物は初めてなので僕はまず街にあるいろいろな彩色パリーナを見て回る事にした。

「こうしてみるとこのパリーナというのも奥が深いんだな」

あれから数日、街の至る所にある彩色パリーナを見て回ったけれどただ彩色をしていただけではなくてその場所を象徴する文様だったり、色であったり、またはそれに施す装飾によつてメッセージを込めていたりだとか絵柄などはシンプルなものが多いにせよ、奥深さも求められるデザインが必要なようだ。

「なかなか難しい事になつてきたな．．．ARIAカンパニーか．．．」

（お兄さん、どうしたの？何か嫌な事あつた？お顔が暗いよ？）  
すると僕の中に一人の少女の声が響く。

「大丈夫だよ、ラズリンティス。考え事してただけだから」

あれ以来、僕と蒼のフロマ基『ラズリンティス』は深層世界で会話をする事が出来るようになっていた。ラズリンティスはギリシヤ語で和名を『瑠璃色』、青色を表す言葉では最も高い意味を表すウルトラマインの別名でもある。

（よかつた．．．頑張つてね、お兄さん？）

それだけ言うとな彼女はまた僕の深層世界へと消えていった。

「ラズリンティスからも応援されたし、頑張つていきますか〜！」

僕は朝食を済ませるともう一度、ARIAカンパニーを見に会社へと戻つた。

「ただいま・・・って誰もいない」

帰ってきたものの誰もいないので一人でA R I Aカンパニーを色々な角度から見ながらデザインの糸口になるものを探してみる事にした。

「ちよつと痛んでいるところもあるけど綺麗にされてるよな？毎日、灯里ちゃんにアリシアが掃除してるし、構造もしっかりされてるな」

建築物を以前書いた時に少し建築学も噛んだので少しは理解出来る処がある。

「ここも考えてみるとアリシアがペア時代から使ってるんだよな。それが後輩の灯里ちゃんに引き継がれて・・・歴史を感じる部屋でもあるよね」

ふと見てみると奥の部屋の扉が開いていてそこから話し声が聞こえてきた。

「灯里ちゃん？」

「ああ！カイトさん、見てください。これ昔の会社の写真ですよ〜！」

「どれどれ？」

アルバムには色々な写真が載っていてその中の一枚にウェーブかかったロング

へアーに例えるなら聖母のような慈悲の笑みを浮かべている女性と何とも若々しいアリア社長が映っている写真がアルバムに挟まれていた。

「これは……?」

「これもしかしてグランマー!アリア社長も若々しい!」

灯里ちゃんからでた『グランマ』という言葉が不思議に思っていると説明してくれた。グランマというのはA R I Aカンパニーの創設者で最高齢引退、30年間トッププリマという偉大な記録から『伝説の大妖精』『グランドマザー』と呼ばれ今でも目標とされる人らしい。

「へえ……そんな人がいたんだ。んつ、これは……」

アルバムの最後のページに何か紙が挟まっていてそれを開いてみてみた。

「これって……パリーナの画ですか?」

「そうみたいだね。それにこれの日付、丁度、グランマがここを建てて少したったくらい年代だからかなり前のモノだよ」

その紙にはパリーナのラフスケッチが書かれていた。少しではあるが色も塗られていたけれどほとんど未完成のまま放置されているような感じだった。

「これって昔にパリーナを作ろうとしてたって事ですすよね?」

「だろうね。でも原案まで出来てたのに何で作られなかったのかな?」

「アリア社長、何か知ってませんか？」

「ふいにゆゝい」

さすがにそこまでは分からないという感じのアリア社長。まあ、この頃だったらまだ社長だつて子供くらいの歳だろうから覚えているはずもないか。

だけれどこのデザインというのはある意味では僕にとつて糸口になりそうでもあるので偶然でもこの発見は助かるものだった。

「僕、図書館にいつてくるよ。デザインの文様とか、ちよつと調べたいんだ。それとこのデッサン、借りていつていいかな？」

「はひつ！わたしもいろいろと考えてみますよ」

「うん」

僕はデッサンをしまつて一度、図書館へ向かう事にした。

「と来てみたはいいものの・・・結局はろくなアイディアが浮かばなかつた」

デザインを元に文献や、この星の文化から生まれた文様などを調べながらAR



IAカンパニーを象徴するようなパリーナデザインを考えていたのだが少しだけぼんやりとしたイメージが浮ぶ程度ではつきりとは定まらなかつた。

「ARRIAカンパニーのイメージ・・・白塗りで海と空に囲まれて・・・」

だが考えに集中し過ぎて前から人が来たのに気が付かなかつた。

「きゃっ!!」

「うわっ!?!・・・つてすいません、大丈夫ですか!」

ぶつかつたのは40代くらいの女性で当たつた拍子にスケッチブックや参考資料などをぶちまけてしまい、急いで拾い集める。

「す、すいません。前をしつかり見ていなくて・・・!」

「あらあら、わたしも手伝うから。落ち着いてね・・・これつて・・・」

その人が貸してもらつたパリーナのデッサン図を見た女性が驚いたような声を上げて震えた手でそのデッサン図を拾い上げた。

「これは・・・なんて懐かしいのかしら」

「えっ!それを知ってるんですか?」

「もちろんよ。これはわたしが現役時代に描いたものだから。まだ残つてたのね」  
「現役時代つてもしかしてあなたはARRIAカンパニーの創設世代の方なんで

すか?そのパリーナのデザインを描いたのもあなた?」

「ええ、グランマにプリマに昇格した後辺りに作りましようかって話になって

ね・・・あなたももしかしてARIAカンパニーに関係ある子なのかしら？」

とりあえず僕は今までのこの星に来るまでの経緯やこのデッサン図を持っていくのかも話すと何か懐かしむ様な目でその絵を見つめて話を切り出す。

「立ち話もなんでしようから今からわたしの家でお茶なんていかがかしら？そ

こで昔話をちよつと聞いて貰いたいわ」

「……………はい、ぜひ」

僕はその言葉に甘えてARIAカンパニーの創設メンバーだった元水先案内人だった人『クリス・マーガレット』さんの自宅に行かせてもらおう事にした。

「はい、どうぞ。特製の生クリームのセコーヒーゼリーよろしく？」

「あつ、どうも」

手渡されたコーヒーゼリーを一口食べてみるととても上品な生クリームの滑らかなさと口どけの良さが際立って料理好きな僕でも感嘆の声を漏らした。

尚且つ、ゼリー自体もいい珈琲を使用しているのか、風味との相性もバツチリだ。「それにしてもこんなものがまだ残ってたなんて。懐かしいわねく……」

それから昔のARIIAカンパニーの話をしてくれた。

「会社が出来てわたしが第一期の新入社員で最初は2人で始めたの」

最初の頃は客足もあまり無かったがグランマ、本名を『天地 秋乃』さんの人気もあってか、次第に忙しくなり、クリスさんもプリマ昇格後、新しい新入社員や忙しさが姫屋よりないにしろ忙しくなったらしい。

「これはプリマに昇格して少し経った辺りにグランマからうちもパリーナを立てましようかと話があつてそれでわたしがデザインを描いていたんだけれどさっき言った通りに忙しさに流されていつの間にか忘れてしまったのよ」

「そうだったんですか」

「今になって何故、これを？」

「実は今、ARIIAカンパニーでシングルをしている子がパリーナを創る事になつて僕もデザインを考える事になつたんですが偶然、見つけてこれを参考資料にしているんですがなかなかイメージが湧かなくて」

何故か、もう少しのところまでできている気がするのに鮮明さが増してこない。

「それはあなたがまだARIIAカンパニーという場所をイメージで追い過ぎてい

るからじゃないかしらね」

「イメージで追い過ぎてる・・・ですか?」

「パリーナをゼロから作るうとしてイメージばかりで急ぎ過ぎているから本来の姿が見えないのかもしれないわよ? ARIAカンパニーはゼロじゃないわ、わたしやその後輩達が積み重ねてきた歴史がある」

そういつて懐かしむ目で視線を向けた先を見てみるとそこにはグラマンマにクリスさんに引退する少し前に入社した後輩と取っている写真があった。

「イメージじゃなくてそこにあるARIAカンパニーを見つめれば意外と簡単に鮮明に見えなかったあなたのイメージが現実のモノに固まるんじゃないかしら」建物だけじゃなく、そこにいた人、そして今いる者、ARIAカンパニーの全てを見てみる事でパリーナに具現化するデザインが出来るのではないかとクリスさんは提案してくる。確かにイメージだけで考えようとしていた節はあった。

「あの時のわたしも今思うととても勿体ない事をしてたように思えるわね。」とでも楽しくて満ち足りた素敵な日々だったのにあつという間に過ぎていつてしまつてそんな当たり前だった時間の愛おしさに後々気付いて・・・」

そんな当たり前な日々、小さい事なのかもしれないけれどその1つ1つを楽しんでいられたら・・・前にアリシアが言っていた言葉を想い出した。

今の僕はとても充実した日々を送っている。前の自分では考えられないくらいに世界が輝いて見えるし、この星にきて出来た仲間やであった人達のお陰で信じられないくらいに笑えていた。でも取り逃している楽しさがあったかもしれない。

「でもこのデザイン図を見たら思い出すわ。あの頃の本当に些細だけど幸せな

ARRIAカンパニーで過ごした時間を・・・昨日の事のように浮かんでくる」

本当に簡単なデザインを描いただけの一枚の紙でもクリスさんにとつては昔の自分と出会うことが出来るモノなんだなと思うのだが僕は思った。

これから作るパリーナもいつか歳をとつた僕が見たとき、今の悩みながら歩いき始めた自分や出来た楽しい思い出であるようになるのだろうか。

「(ありのままのARRIAカンパニー・・・なんだかわかった気がする)」

なんとなくだけれど自分の中には引掛りがとれたような、靄が晴れてきた。

「クリスさん、出来上がったらパリーナを見に来てください」

「ええ、ぜひ行かせてもらおうわ」

そこで固い握手を交わした僕はARRIAカンパニーに戻った。

「えっ！グランマが来てたの？」

「はい、カイトさんの話もしたら今度会ってみたいって言ってましたよ♪あ

っ、それとこれ！グランマが持ってきてくれたとうきびです〜！」

丁度よく茹でてくれていたらしく綺麗な黄色に茹で上がったともろこしが出てきてそれを熱々のところでいただいたのだがとても甘くて美味しかった。

「カイトさん、なんだかわたし少しデザインの仕事が分った気がします」

「実は僕もね。なんとなくだけ道筋が見えてきた気がするんだ」

そういつて顔を見合わせて笑みを見せ合うと声をそろえて言った。

「頑張つてA R I Aカンパニーのパリーナ作ろう〜！」

こうしてそれから僕と灯里ちゃんの2人で一緒にパリーナのデザインに取り掛った。

「海の色は蒼い色・・・風の音は白い色・・・わたしも大好きな色をこの絵を描

いた人も好きだったんだろうな〜ってわたし想うんです」

これを聞いた僕は今日会ったクリスさんの話をした。

「えっ！これを描いた方に会えたんですか、カイトさん！」

「うん。昔の話だとか、いろんなことを聞いてきた。後はイメージだけを追い過ぎてた事にも気づかせてもらって僕と灯里ちゃんが今実際に見てるARRIAカンパニーを具現化させたらって言われてデザインが固まったんだ」

そういうと僕は灯里ちゃんの意見も取り入れながらデザインを進めていく。そして最後にパリーナに描く模様になったのだが僕の中ではすでに決まっていた。見つめたのは灯里ちゃんが来ているARRIAカンパニーの制服の模様だった。

「色はシンプルでいい。灯里ちゃんの感じた青と白、それに僕が感じたARRIAカンパニーの象徴的な模様のアレンジも加えて……」

こうして僕と灯里ちゃんはパリーナのデザインを描き終える事が出来たのだった。

「どうかな、アリシア？」

「とても素敵だと思うわ、完成が楽しみ♪」

「はひっ、頑張りましょうね、アリア社長！」

「ぶいっちゅーい！」

もちろん！つと言っているようで机の下から顔をだし賛同する社長。さてこれからが本番だ、頑張らないと！

「オーラーイ、オーラーイ」

まずはパリーナの元となる大きな丸太をウツデーさんに運び込んでもらい早速取り掛る。灯里ちゃんがメインで線図を引き、僕は指示しながら補助に周ってアリア社長はペンや定規などの道具交換を頼んだ。

「おお、やってる、やってる」

しばらくして藍華ちゃんとアリスちゃんもやってきた。

「何かお手伝いしましょうか？」

「猫の手も借りたいくらいでしょー？」

しかしここで手伝ってくれている“猫の手”が主張する。

「ぷいー！」

「ありがとう、でももうちょっと頑張ってみたいから」

「んじゃ、気合入れてがんばんなさいよー！」

「でっかい楽しみにしてますから、カイトさん」

「うん、わかった。いいパリーナにしてみせるよー！」

2人を見送って僕と灯里ちゃんは作業に一艘、没頭した。



そして線図を描き終えて今度は着色作業に入る。絵にも言えることだがこの作業のぬり方一つで見た目が大きく左右されるので重要な段階でもある。

「ふう〜・・・」

汗をぬぐう灯里ちゃん。あつ、おでこにペンキが・・・。

「ふう、ふう、ふう、ふう、ふう、ふう、ふう、ふう」

おや？アリア社長も気付いたかな、それはさすがに笑・・・つて、おい。

「はひっ!?もしかしてわたし顔にペンキついてますかー!?」

そこで灯里ちゃんも気付いたようだ笑っているアリア社長の状態を。さつきペンキの蓋を開けようとしていたのだがどうやら勢い余って自分の顔に蓋の縁部分がついたらしく、顔には綺麗な青丸が出来ていた。

「アリア社長・・・(汗)」

こんな事もあったが作業も終盤に入ってきた。

「(青・・・それは、海と空の色　A R I Aカンパニーが出来た時から変わらな  
い色、これからずっと)」

「(パリーナをA R I Aカンパニーとするならそれを彩る色はこの場所を表して  
いる色だ、ならその色は海と空の青、そして風や雲の白、これだ)」

こうして僕達の作業は夕方まで続いた。

「あらあら、まあ〜♪」

「あつ、おかえなさい」

「おかえり、アリシア」

「完成したのね、素晴らしい出来だわ」

出来たパリーナは頭を球体にそして白をベースに青でARIAカンパニーの制服の模様を描いたシンプルな彩色パリーナに仕上げた。

「そうだ、今日はここでディナーにしようよ。パリーナ完成を祝ってさ」

というより元からそのつもりで出来上がってから夕飯もすでに準備していた。

「はひっ♪」「そうしましょう♪」「ふい〜！」

そしてアリシアのゴンドラに3人と社長で座り、アリシアがグランマから貰ったとうきびで作ったコーンポタージュをふるまってくれた。

素材本来の甘さとほんのりとした温かさが疲れた体には丁度よかった。

「うう〜、幸せの味〜♪」

「あらあら〜♪」

「恥ずかしいセリフ禁止！」

「ええ〜」

「あらあら、うふふ♪」

「1人でよく頑張ったわね、灯里ちゃん」

「これに灯里ちゃんが首を振る。

「1人じゃなかったですよ。このデザインを描いた先輩がずっとそばにいてくれた気がしました、もうここにはいない名前も知らない先輩。それにカイトさんだっていましたから」

「僕だけじゃないよ、実際にこれを描いた人の助言もあつてこれが出来たんだ」

しばらくパリーナを見つめていたアリシアが考えに耽りながら話始める。

「いつかわたしも引退して・・・一人前になった灯里ちゃんがわたしの知らない

後輩とこのパリーナを見上げる日が来る」

「わたしはその時、どんな風に変わってるのかな。なんだかちよつぱり怖いです」

アリシアが笑いながら語りかける。

「大丈夫よ」

「そうでしょうか」

「パリーナを作っている間、先輩を近くに感じていたんでしょう？水先案内人を

引退してもその時のデザイン画はその時の彼女がそのままそこにいて灯里ちゃんに語りかけてくれる・・・同じ事よ？」

アリシアの言わんとしている事は僕にもわかった。

「そうだね、この彩色パリーナはARIAカンパニーにあり続ける。灯里ちゃんがここを去った後もね。このパリーナは君がここにいた確かな証になるんだ」  
彼女の後輩、そしてそのまた後輩にもこの彩色パリーナは自分の先輩「水無灯里」が作ったモノなんだって彼女を知らない未来の後輩であってもこの瞬間の彼女に触れる事が、感じる事が出来る。今なら僕はそう思えた。

「そうね・・・このパリーナは今の灯里ちゃん自身、そのものよ」

そして灯里ちゃんは彩色パリーナを見つめながら感慨深げにつぶやいた。

「今のわたし自身・・・そのもの・・・」

吹き抜ける風を感じながら僕はふとこんな事を口走っていた。

「つていう事はさ、ずっとずっと先、僕やアリシア達が離れ離れになってもこの彩色パリーナに会いに来れば今日の僕達に会えるって事だよな？」

そんな事を言った僕の顔を灯里ちゃんとアリシアがはっとしたように見つめる。

「あつ」

「はつ」

「まあ」

「はんっ」

「ど、どうしたの、2人と——」

「凄いわ、カイト!」

「凄いです、カイトさん!」

そう言つて2人は彩色パリーナを見上げて目を輝かせる。

「本当に……すごい……」

なんだか感動してもらえたみたいだけれど確かにそうかもしれない。僕がいずれこの星を去つたとしてもこの彩色パリーナの存在は確かにこのARIAカンパニーで「カイト・F・コロレ」がいた確かな証になる。

遠い、遠い日にこの場所で大切な人達と過ごした大切な時間、そんな時間にまた未来で会えると思うと何故だか楽しみが増えてしまったようなそんな気がする。

「ふふっ・ふふふっ・ははっ・ははっ・ははっ、ははっ♪」

何故だかそれから笑い出してしまった僕だったけどこの瞬間も素敵な事なんだろうなと忘れない様に想い出の1ページにちゃんとしまい込んだのだった。

## 第10話 そのポツコロの日に・・・

カイト「ふう・・・にしてもまさかこんな日があるなんて・・・」

今日は朝から驚きの連続だった。朝起きてみるとARRIAカンパニーの一階が完全に

心酔してしまっていて僕はこの世の終わりなのかと大慌てしていたのだが灯里ちゃん

から説明があつて納得した。

今日は『アクア・アルタ』と言って一年の中で最も海面が高くなる日らしく、毎年、毎年こうなるのだという。だが僕にとつて問題だったのはもう1つの方だった。

カイト「あの色だけじゃないけど・・・やつぱり眼には辛いな」

この日は『ポツコロの日』と呼ばれていて好きな人や大切な誰かに一本の赤いバラを送る日らしくそこかしこで薔薇を貰った人達が幸せそうに歩いていた。

薔薇も様々でミント、ピーチ、レモン、ラベンダー、濃ピンク、ピンク、もちろん一般的なあの色など多種多彩な色の薔薇を送っているのだがあの色がやはり多くて僕に

とつては頭痛が酷くなるだけのある意味では最悪の日だった。

「んっ?カイト?」

「えっ・・・?」

ほとんど虚ろな目の先にいたのは晃で座り込む僕を見て心配そうにかけよってくる。

「おい、大丈夫か? 一体・・・あつ、お前、そういえば・・・」

「ははっ・・・面目ない・・・」

晃は僕があの色を見ると頭痛が酷くなるというのを知っていた。というのも前に姫屋

に行つた時にあまりにその色が多すぎて倒れそうになつた事があつたんだ。

僕に肩を貸して支える様にして起してくれて気遣いの言葉をかけてきた。

「ここからARRIAカンパニーは遠いし・・・そうだ、いい事思いついた!」

「?」

とそのまま連行された僕だったんだけど連れて行かれた場所は予想の斜め上をいった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう、アテナ。ごめん、いきなり押しかけちゃって」

「うんうん、今日はわたしもお仕事がないからちよつと退屈してたの。大歓迎よ？」

晃に連れられてやってきたのはオレンジプラネットでアテナに無理を言っただけの部屋に

あ  
がらせてもらったのだが他店の従業員がポンポン軽く入っていいモノなのかと疑問に

思っただがそこは晃とアテナの仲・・・でつくものなのだろうか？

「はい、麦茶。ゆっくり休むといいわ」

「ありがとう、アテナ」

よく冷えた麦茶を流し込む。その冷たさに少し頭が冷えてきたのか少しクリアになつた。

「ふう・・・今日は厄日だな・・・」



そんな中、いきなり晁が立ち上がるといきなり腕を取られて立ち上がらせる。

「おい、アテナ。お前もこれから別に用事ないよな？」

「うん、今日はこのまま部屋でゆっくりしようかなって思ってたから」

「だったら今から付き合え。カイトも今から一緒にこい！今日はわたしがポツコロの日の良さを教えてやるよ、厄日で決めつけるには勿体ないぞ！」

そういうとそのまま腕を組まれて引つ張られるアテナももう片方の腕に組み付いて  
き

抵抗する僕を2人がかりで引つ張っていく。さすがに2人がかりには勝てなかった。

「分かった、歩くからくつつかないでくれ！（汗）」

いろいろとまずいんだ。僕だってあまりそういう触れ合いがないにしろ、男なわけだ

しこれは色々雑念が生まれて精神上、よろしくないというか。

「おお、悪い、悪い。そういうえばお前も男の子だったな」

「ね〜」

「なんだか・・・妙にぐさりとくる一言だったよ・・・晁」

そんな僕は2人に引つ張られつつ、また街へと戻る事にした。

「い・・・これは？」

街に出た僕が最初に晃にされた事というサンングラスを掛けられたのだがそのサンングラスがまったく見えない。というか、マジックで塗りつぶされていた。

「これで安全な場所についたらとればいいだろ。いいおすすめのスポットについてから教えてやるよ。水の三大妖精の2人を貸切りで案内してもらえるなんてお前は今日はついてたな、カイト♪」

なんだかこの状況だとしているのか、ついていないのか、なかなかあやふやだ。

それから僕は晃とアテナの2人がおすすめする店だとかスポット巡りになった。

「ここのお茶は薔薇のエキスを抽出した特別なのを使ってな、このポッコロの日だけの限定品なんだぞ？」

確かに一口飲んでみると上品な薔薇の香りが広がるローズティーで気分が落ち着いた。

「そういえばカイトはポッコロの日の由来って知ってる？」

「いや、僕も最近になって知ったばかりだから由来までは分からない」

アテナによるとかつて無名の騎士が名家の姫と恋に落ちたが身分の違いのために反

対されてしまったが戦争で名を上げ、認めて貰おうと若者は戦争に出たのだがそこで倒れ、死ぬ間際に戦友に自分の血で赤くなつた一輪の薔薇を遺品として渡してくれるように頼み娘はその薔薇を見て若者の死を知つたという。

「それから愛する人、大切な人に一輪のバラを贈るのがポツコロの日の習

わしになつたの。もちろん、今は色々な薔薇があるから赤が全てではないけど」

「2人は送られる薔薇の数が凄そうだね。今日、アリシア当てに凄い量来てたし」

「あいつは水先案内人の中でも薔薇の数が毎年トップだかんなく。くそつ・この

晁様を差し置いてNo.1になりやがるとは」

「基本的に晁はアリシアには対抗意識を燃やすよね。まあ、ライバルなんだろうけど」

「ライバルだけれど一番の親友よね。一緒にいるから今も成長出来る、そんな仲」

これはなんだか羨ましいなと思う。僕にはこういう親友と呼べる人間がいなかった。

まあ、ふさぎ込んでただ学生生活をしてた僕が悪いんだけどこっちに來て友人

と呼べるが出來たように思える。

「なに、暗い顔してんだよ？」

「え？」

「自分には友達いないってな顔してるけどもうわたしらはダチだろ、カイト？」

肘で小突きながらにかつと笑いかけてくる。何だかんだ言つていい奴なんだよね、晁

は。

「そういえばカイトは誰かに薔薇あげるの？色はまだ何種類もあるから大丈夫だと  
思うんだけど？アリシアちゃんとか灯里ちゃんにお礼で上げたらく？」

「そうだね、そうしよつかな」

とはいえ、晁はまだまだ案内する場所があるようでそのままアテナ同行で向かった。  
なんだかんだあつたけど楽しめた。晁とアテナが色々と気を使ってくれたし、アリ  
シア達とはまた違つた視点で見つけたいい場所などもあつて最初は気分が悪かつた  
ものの、すっかり良くなって楽しい一日は過ぎていった。

「ただいま〜つてあれ〜？カイトさん、何作つてるんですか〜？」

「うん？ちよつとね、贈り物を作つてるのさ」

家に帰つた僕はあれから薔薇を送ろうと思つて買いにいったんだけどどれもこれ  
もあの色ばかりで結局は駄目だったのだが絵で描くというのもワンパターン過ぎる  
と考えた僕が行きついたのは前に芸術面の資料の1つで見たかつての東洋の国にあ

つたとされる和菓子という創作お菓子の事でこれで薔薇を作ろうというのだ。

もちろん灯里ちゃんとアリシアのも作った。最初に作ったから若干、下手だけど。

「結構難しいんだな。彫刻刀でこれだけの細工をするなんて・職人は凄い」

改めて挑戦してみて他の芸術の面白さだとか難しさに触れられて自分の知識も増えたし、なかなか興味深い分野だなと思う。

「がんばってくださいね、カイトさん♪」

「ありがとう、灯里ちゃん」

こうして僕は晁とアテナのための和菓子作りを続けるのだった。

「今年もまあ、部屋に満タンに届いたもんだな・・・ファンが多いのはいいが」

晁は部屋で貰った薔薇の整理をしていた。大体、こういうものは1つのオブジェにして会社に飾る事になるのだがそれをカイトに頼もうと思っていた晁。

「薔薇は頼んで赤以外にしたらあいつも大丈夫なはずだし。完全な赤じ

やなければ大丈夫って言ってたもんな。少しはあいつと話も出来るし」

言つてしまえばカイトがちよつと気になつてゐるのだ。今迄とくに男に興味を持つた事はないのだが彼の描いた温かな絵を見てゐるうちに興味が出てきてちよつと気になる男の子になつてゐたがそれは内緒である。

「晃さくん、カイトが来てますよ?」

「カイトがか? ちようどいいや、通してくれ」

しばらくするとカイトが入つて来て何やら手に荷物を持つてゐる。そしてやつぱり最初に部屋に入つて来て大量のバラをみて顔が引きつったのだがすぐに自分にとつては無害な薔薇だというのが分つたのか入つてくる。

「ちよつと昨日、案内してもらつたお札にちよつとお菓子作つてきたんだ」

「お菓子? そういえばそろそろティータイムか、丁度いい。お茶にしようか」

そういつてテーブルに座り、カイトが作つてきたお菓子にわたしのお気に入りの紅茶も淹れて2人でティータイムという事になつた。

「アテナにもあげてきたんだけど結構、好評だつたんだ」

「へえ、見せて貰おうか。その自信作、わたしはお菓子にはうるさいぞ?」

カイトが取り出したのは桃色に近い生地を細かい細工の施されたお菓子で見た目はかなり和な雰囲気があつてとても綺麗な薔薇がそこにあつた。

「凄いな・・・こんな細かい細工をよくやるもんだ」

はつきり言うとお食べるのがもったいないくらいの出来だが一口食べる。ほのかに薔薇の香りが生地からしてほどよい甘みもまたいい。

「昨日は結構楽しませてもらったしき。案内してもらうまで何て最悪な日なんだって思ってたけど晁達に案内してもらっていろいろと考えを改めたよ。今日はそのお礼にこれもそうだけでももう一つ、あるんだ」

そういつてとりだしたのは薔薇のガラス細工の指輪でとても綺麗だった。

「これ・・・綺麗だな」

「いつも世話になってるアリシアとか、灯里ちゃん達にもそれぞれのイメージした色の薔薇のガラス細工をプレゼントしたんだ。僕にとっては初めて出来た友人だし、大切にしたいと思える人達だからさ」

するとカイトがその指輪をもつとわたしの手をとった。

「なんだかこれだけ薔薇に囲まれてると晁でもお姫様に見えてくるな（笑）」

「すわっ！それはどういう意味だ！」

怒りだしたわたしを無視して指に指輪をはめるとちよつと可笑しそう顔でこういった。

「はい、僕からの気持ちです、薔薇の姫君様？」

なんとも柔らかい笑みを浮かべながらそんな齒に着せぬ事を言ってきたので何故だか

わたしは恥ずかしくなって顔が赤くなる。

「す、すわ!! 恥ずかしい台詞禁止だ!」

「ええ〜?」

こいつ普段は頼りない言動が多い癖にたまにこういう恥ずかし過ぎる台詞を吐きやがって・・・これは灯里ちゃんとアリシアの影響を受けたに違いない。

「んまあ〜・・・なんだ、ありがとな。ありがたく受け取っておく」

「どういたしまして」

なんだかこいつも前会った時と随分、変わった気がする。前は随分と自信なさげな顔だったのに今は生き生きとしているというか、表情がはつきりとしている。

昔描いたって言う絵も見せて貰ったがやっぱり絵も描いているカイトを表しているのかまったく絵の感じが違うし、今は絵もいろいろな表情を見せていた。

「なあ、カイト。このネオ・ヴェネツィアはいい場所になったか?」

わたしはそんな事をカイトに聞いてみた。

「まだまだ分からない事が多いけど好きになれたよ、この街もアクアも。みんなにも会えたり、絵描きとしてもここから歩きはじめられたしね」

それからカイトが徐に手を差出してくる。

「迷惑かけるかもしれないけれどこれからもよろしく、晃」



「……」

なんとも律儀な奴だなと想いながらも笑みを浮べてその手を取った。

「ああ、わたしの方こそよろしくな？　……そういえばお前、アテナとアリシアの絵を描いたそうだな！　なんでわたしの絵はか・か・な・いんだ？」

そういつて腕の間に頭を挟む絞め技にかけるとカイトがもがきだした。

「痛い!? 痛い?! たまたまそういう機会があったから描いただけであって別に晁の

だけ描かなかったわけじゃ———というか、痛い?!」

「おおっと悪い、やり過ぎた」

とりあえず解放されたカイトが自分の荷物から道具一式を取り出すとわたしの手を

と

つてベッドに座る様に指示するとそこで足を曲げて腕を前で組む様なゆったりとし

た

ポーズをとってそのまましばらくいてくれと言われた。

「僕なりに晁のイメージの絵を描いてみるよ。ずっと逃げてはいられない・・もんね」

わたしの絵を描くとなると大体のイメージとしてカイトが苦手な色を使わざる得な

い

のでこいつからするとかなり神経を使う事らしい。

わたしはふとこれだけ言った。

「無理しないで今のお前が使える色で描いてくれ。わたしはそれでいい」

「・・・分った、精一杯やってみる」

それからというもの、カイトは何度か絵を描きに部屋を訪れるようになった。中々あの色を使うのは苦勞しているようだけれど少しでも進んでいるらしい。

出来るのはまだまだ先になりそうだと言っていたがわたしは精一杯、やってこれ以上ないってくらいまでやりきれたら絵を貰うと言って気長に完成を待つ事にした。

何故、カイトがその色を使えないのか、理由は言ってくれないがそれでもいい。今のカイトならいつかそれも乗り越えて話してくれる時はくる。

今のこいつだってここまで代わったのだから代われないわけはないんだ。

こうして最近のわたしの楽しみにカイトの絵の完成を待つ事が加わった。後、あいつから貰った薔薇の指輪をふと眺めるのも日課になった。

というよりわたしはどうしたんだろうか？こんな事ばかり考えるとは・・・今はこれが何なのかわからないがそれでもこいつという時間は悪くない、そう思えた。

「まあ、ちよつといつものに比べたら下手つぴだけど精一杯のいい絵じゃんか」

そんなあの時の事を想いだす。指で弄ぶ薔薇の指輪を眺めながら同じように目線を送った先には少し雑ながらも描いた人の精一杯さが伝わってくる今のカイトが使えるあの色……かなり苦勞したらしいけれどわたしにとつてはとてもいい絵だった。「がんばれよ、未来の名画家。わたしは応援してるからな」

なんとなく気持ちに感づき始めた、そんなわたしは自分でもわかるくらいに柔らかい笑みを零していた。

あいつ……今度はどんないい絵見せてくれるかな？ 楽しみだ……。

## 第11話 その胸躍る時間に……

ある日の夜、僕がARIAカンパニーの寝室で先生からのメールにあつた美術学校の課題のための絵を考えていた。だいたいの学生は学校で絵をしあげるのだが僕のように別の場所で研修をしている生徒は期間内にメールでそれを送らなければならぬのでどうしたものかと考えていたのだが寝室に灯里ちゃんがやってくる。「カイトさん、今度、お祭りにいきませんか？」

「お祭り？」

話によるとネオ・ヴェネツィアの下町通りで小規模ながら夏祭りをやるらしく灯里ちゃんもこの星に来てから毎年行っているモノらしく今年も藍華ちゃん達と一緒に行くので僕も一緒にいかないかと誘ってくれたようだ。

「もちろん、行かせてもらおうよ。灯里ちゃん」

「わーい、これで皆で行けますね、今年はアリシアさん達もお休みで一緒にい

けるみたいですし、今から楽しみ〜♪」

なんだか最近はこの灯里ちゃんの幸せ顔を見ていると妙にほつとするとするか、和んでしまう。考えてみると僕にもう一度、歩かせるきつかけをくれたのは彼女で本当に僕にとっては大切に想える人の一人になっている。

「それでカイトさん、明日、お祭りに着ていく浴衣を買いにいきましょう」

「浴衣か、古来の伝統衣服の勉強で見た事あるけど実際に着る事になるとは」

なんとなく今から楽しみになってきたお祭りに心が躍ってきた僕だったりする。

・  
・  
・

「随分と色々な柄があるんだな、これは目移りしちゃうよ」

次の日、僕と灯里ちゃんは一緒に浴衣を買いに出かけた。女物ばかりかと思いきや男物もしっかりと品ぞろえが充実していて僕でも目移りしてしまう。

「カイトさん、カイトさん。こんなのはどうでしょう」

そういつて灯里ちゃんがあてて見せたのは彼女の髪の色と同じちよつと薄めの桃色をベースにしたシンプルなモノで帯は青で作られていた。

「でももうちよつと冒険してもいいんじゃない？ 灯里ちゃんだったたら柄物とかでも似合うと思うよ、可愛いんだし」

「か、可愛いですか？・・・（もじもじ）」

何で恥ずかしがるのかな？ 灯里ちゃんなら誰でも可愛いと思うと思うけど。そこで僕なりに似合いそうなものを見繕って彼女に着て貰った。

白地に彼女の髪と同じような色あいの花が描かれているもので帯もちよつと装飾が施されているタイプ、元の素材がいいのだからアクセントは少しいい。

「うん、すつごくいいよ、灯里ちゃん！」

その場でくるつと一回転してみせた灯里ちゃんはちよつと恥ずかしそうに笑う。

「わたし、こんなの初めてで・・・ドキドキでこそばゆいです」

「（うっ・・・可愛い・・・って僕はまた邪な考えを！）」

時折見せる灯里ちゃんのこういう笑顔ってドキツとしちやうんだ、僕って。

「おーい、灯里〜！ カイト〜！」

声が聞こえて振り返ってみると藍華ちゃんがやってきて彼女も買いに来たらしい。

「なに、なに〜？ もしかしてあんたら2人でデートとかしてたわけ〜？」

何か面白そうなモノを見るような目で藍華ちゃんが突拍子もない事を言ってきた。

これにはさすがに僕も顔を赤くして否定するのだが灯里ちゃんはさらりと言う。

「愛華ちゃん、デートって恋人同士がする事を言うんだよ。わたしとカイトさんはお友達だからデートとは言わないと思うよ？」

「……あんた、何気に酷い事を言うわね。(ちよつと大丈夫?)」

「(ああ……邪念がない分、笑顔で言われると致命傷になるね……(汗))」

本人に悪気はないのだが普通にぐさりと来る言葉だった。いや、友達なんだからそれはそれでいいんだけど……男としての魅力はないのね。僕って(汗

・  
・  
・

「つてあれ? 灯里ちゃんと藍華ちゃんがいらない……というかはぐれた……」

人の波にのまれて気付いたら2人とはぐれてしまつてしばらく探し回っていた。

「あつ、いた。おーい、カイトー!」

すると藍華ちゃんが現れてどうにか合流すると一旦、人ごみから離れた。

「藍華ちゃん、灯里ちゃん見なかつた?」

「うんうん、わたしも探してただけで見つかなくて……。とりあえ

「ずヒメ社長がわたしに任せなさいって感じで探しにいったんだけど」

「大丈夫なの・・・？」

「しつかりしてる社長だから・・・大丈夫・・・なはず」

「なんだかとてもなく心配になってきたんだけどこうなっては仕方がないのでここでしばらく待つ事になった。」

「そういえば最近はどうなの？絵の調子は」

「うん、前よりよくなってきたよ。少しは自分でも納得がいく絵が一先ずは描けるようになったしね・・・とは言ってもまだまだだけどき（苦笑）」

「ああ、後、この前、晁さんが貰った絵、すつごく気に入っちゃって毎日毎

日、あれ眺めてるわよ？あの晁さんがあそこまで入れ込むものないわよ」

「ははっ・・・それは光栄だな。僕としてはかなり失敗しまくってたんだけど」  
初めてあの色を自分から使おうと思って使った絵。でもまだ色ははつきりと見えなくて色の配合比を目分量でやりながらどうにか塗ったんだ。

「ねえ、ねえ、今度はわたしの絵を描いてよ！」

「藍華ちゃんのみ？」

「だって後輩ちゃんとか灯里とかアリシアさん達も描いたんでしょ？わたしだけ除者なんて酷いでしょー」



考えてみると灯里ちゃんを筆頭にアリシアにアリスちゃん、アテナ、晃ときて愛華ちゃんはまだ描いていなかった。

モデルとして藍華ちゃんも申し分ないし、提出の課題作品は藍華ちゃんを描いてみるか・・・となると色々構図とか風景の場所を決める必要があるな。

「それじゃ藍華ちゃん、まずは衣装合わせをしちやおうか」

「えっ？服も代えるの？」

「折角、描くんだから季節のモノを取り入れたいからね、少し人ごみも減って

きたし、灯里ちゃん達を探しながら藍華ちゃんの浴衣選ぼうよ」

「う、うん。分かった」

こうして僕は藍華ちゃんと共に彼女の浴衣と灯里ちゃん達を探す事になった。

「こんなのどう？」

「ちよつと子供っぽいかな……。もう少し背伸びしてもいいと思うよ？」

それから僕達は灯里ちゃんがなかなか見つかからないまま浴衣選びも同時進行

でやっていたのだがいつの間にもやらそつちの方に集中してしまっていた。

最初は渋々だった藍華ちゃんも次第に協力的になって色々と着てくれている。

「こんなのどう?」

「いいんじゃないかな。小さい花柄がアクセントになっていいと思う」

藍華ちゃんもその浴衣が気に入ったようでそれを買おうと試着室に向かった。

「ど、どうよ。この藍華様の浴衣姿は……!」

ちよつと顔を赤くして試着室から出てきた愛華ちゃん。いつも堂々として

いるけどやっぱりまじまじというのは恥ずかしらしい。

でもいつもの三つ編みじゃなくてポニーテールにしてちよつと雰囲気も違う。

「それじゃちよつと背景決めしようか。うんとどこがいいかな」

「そうね……家庭用の船場とかは?水場と夜景って写真でも綺麗そうよ?」

「うん、それいいかも。えくとそれじゃ、確かいい場所があったと思うか

ら行ってみようか、藍華ちゃん」

「うん」

それから僕は今までずっと街を見てきた事を活かしていい夜景と船着き場の交差している場所に愛華ちゃんと向かう事にした。

・ ・ ・

「ねえ、1つ聞いていい？」

「何、藍華ちゃん？」

「なんであんたつていつも赤だけ使い方が雑になつてんの？他の色はすつごく

いい色つかいなのに．．．なんか妙に違和感があつてさ」

いきなり突つ込んだ話を切り出されたので面喰つてしまった僕。というより今まで僕がその色を使った絵つて2枚ほどだったんだけれどよく見てるな。

「というより藍華ちゃん、他の絵の事も知つてるの？」

「まあね、後輩ちゃんとかから話聞いて色々と見せて貰つただけどカイ

ト前と違つていい絵描くじゃんつて思つただけど晁さんの絵だけ妙に雑というか違つて見えたからさ、本人はかなりお気に入りみたいだけど」

見ている人からすると分り易い変化だし、これはいつまでも隠しておせるわけもないくらいのもので、僕は少しはぐらかして話す。

「小さい頃ね……ちよつとトラウマっていうのかな？それ以来、僕は赤が

見えないんだ、その色が僕には異物のように見えるんだよ」

いきなりの事で藍華ちゃんも反応に困っているようだった。

「実際に僕が赤をみると………こう見えるんだ」

「これ……」

わたしが渡された絵にはりんごと思われる絵だったんだけど表面が赤ではなくて灰色・白・黒とが複雑に混ざったなにかわたしが見てもかなり異様な模様で確かにこれをずっと見ていたら不快感に襲われそうだった。

「これがカイトに見える赤だってわけ？なんかの病気……？」

「医者には精神的ショックによる視認能力の欠落って話だったけど詳しい事は

は分からないし、治療法も見つからない。これもあつて前まではふさぎ

がちで絵も描けなくてね……それでアクアへの研修になったんだ」

それから灯里との出会いや、この街の人達の出会いで少しずつ変わって今では自分でも納得のいく絵も少しずつ描けるようになったらしい。

そして今回、晃さんに描いた絵はある意味でカイトにとつては苦痛だった

ようにわたしには想えた。これをずっと目に入れるって事は彼にとつては精神的にもかなり辛い事でおかしくなっちゃう氣もした。

「晁に今の自分が使える色で描いてくれって言われてき、僕にとつてもあれから初めてこの色と向き合つたんだ・・・その結果があんな杜撰な絵になつちやつて晁には申し訳ない事したつて思つてる」

ちよつと苦笑いで言つたカイトにわたしは晁さんの事を伝えてみた。

「でも晁さん、あの絵をいつも眺めてるわよ？すつごく優しそうな顔で仕事から帰つても見てるし・・・もう額縁に入れてるくらいだしね」

なんどか著名な画家の絵などを渡されたこともあつたんだけどあんまりイイと言わずに会社の壁などに貼つていたのにカイトの絵だけはキチツと自分の部屋に飾つていて何だか晁さんが誇らしそうに見ていたのよね。

「あんな絵でもいいと想つてくれてるなら幸いだよ。今度はもつといい絵を送らないとな・・・ちゃんとあの色を見つめて」

そういつてわたしにどう見えるのかを描いたラフ画を見つめてそう呟く。

「あんまり無理しない方がいいわよ」

「えっ?」

「無理したら昔のあんたじゃない。無理しないでカイトの描きたい絵を描

きたい絵になるまで時間をかけて描きなさいよ。この街の時間は、ちゃんと背中を押してくれるんじゃない？ 晃さんから聞いたわよ、この街がカイトにとつてもいい場所になってくれているでしょ？」

そういつた藍華ちゃんがいつもの惹きつけられる笑みを浮べて言った。

「ありがとう、藍華ちゃん。そうだね、自分の絵を……そう決めた」

「……(ドキッ)」

な……何よ、いい顔で笑うじゃん……ってなんでドキドキしてんのよ、わたしは！ わたしはアルくんが気にな——ってそうじゃない！

「そんじゃ、早速、構図を決めちゃおうよ。カイトの指示に任せるから」

「そうだね、いい絵を描けるようにいい場面を作らなきゃね！」

それから僕は藍華ちゃんと色々なポーズングだとか位置だとかを試してみただけけれど中々、これというのが決まらない。

「うくん……どうしたもんかな」

「それじゃちよつとわたしの髪型とか変えてみる？ 人物が違ってくればま

た違うんじゃない？」

そういつて藍華ちゃんが髪留めをほどいてその長い綺麗な黒髪が風に靡いた瞬間だった。突如、僕達を光が明るく照らす。

それは夜空に咲いた大輪の花。色とりどりの花が咲き乱れていた。

「これは……」

「そうか、カイトって知らなかったもんね。このお祭り前の浴衣市のもう

1つの名物みたいなもので花火職人の新人がここで自分が初めて作った花火を皆に見てもらうの。新人だから……」

その直後に打ち上がった花火は少しかけてしまっていて上手く咲かなかった。

「あんな風に失敗もあるのよね。それで師匠から認めて貰えるまではこの

たった1回のチャンスのためにまた1年修行を続けるんだけれどある意味では新人花火職人の登竜門みたいなものなのよ」

「へえ……でも綺麗だね」

「うん。失敗しても丹精込めて精一杯作った花火だから失敗したってこれを見ている人達はあの花火に魅了されるの。案外、本番のお祭りよりこの新人の花火を目的に見る人も多いのよ？」

さらに空へ上がり続ける花火を見ながら口を開く。

「カイトの絵みたいでしょ？精一杯で作ったモノってさ、どんな人でも魅了して心に残るから……だからいいんだよ、カイトの絵って」

そしてまた大輪を咲かせる蕾が空へと上がり、藍華ちゃんが髪を手で靡か

せながら僕に視線を移して言葉を言った刹那……蕾が開いた。

「……………綺麗だ」

夜空に咲いた大輪の花を背にとても優しげな笑みを浮べて橋に座っている  
藍華ちゃんが並んだ時に僕の中で構図が決まった。

この星に最初に着て灯里ちゃんと夜空の星を見たときと同じ、自分の中で  
それが一枚の絵になって僕の眼に鮮烈に焼き付いて……そしてシャツタ  
ーを押してその刹那の瞬間を逃さず写真に収めることが出来た。

「ありがとう、藍華ちゃん！いい画が撮れたよ！」

「へっ？きやつ!？」

そして僕はまた同じ過ちを犯していた。

「あつ……………ごめ——」

「何すんのよ、この馬鹿——!!」

刹那の衝撃の後に僕は意識を失っていた。

・ ・ ・



「あつ、藍華ちゃんだ♪おーい——つてカイトさんどうしたんですか!？」

灯里とやつと合流したんだけれどカイトはさっきのわたしの一撃で完全に伸びてしまい、足腰がおぼつかないのでわたしが肩を貸していた。

「(こ・こ・こんな奴に別にドキッとなんかしてないんだからねー!)」

そんな一瞬の胸の高鳴りを誤魔化す様にそんな心の叫びを言ったわたしだった。

・  
・  
・

「やつほー、カイト」

「おつ、いらつしやい。藍華ちゃん」

あれからわたしに密かな日課が出来ました。それは・・・。

「へえー、ラフ画は出来上がってきたのね」

あの時、撮った写真を元に描いている課題用のわたしの絵の完成を一からみる事・・それがわたしの最近の日課だったりします。

「完成したらまずはわたしに最初に見せなさいよー! モデルなんだから」

「分かってるよ、でもちゃんと僕も納得できる作品にしたいからもう少し

待ってて……その代わり絶対にいいモノに仕上げるから」

「へへっ……もちろんだつてのよ〜♪」

カイトの過去に何があつたのかはちよつと分からないけど前よりカイトの事が少し分かつて少しは仲良くなれた気がした。

この絵がどんないい作品になるのか……とつても楽しみな、わたしでした。

「ふむ……あれはまさか藍華の奴まであいつに惚れたか……?」

そんな2人を見る晃。だが妙に不機嫌というか拗ねている顔である。

「つうか、後輩に嫉妬とか。バカかわたしは……もつと大人の余裕を見せねば」  
自分の気持ちというのが何なのか、見つけた晃からしていろいろとライブルが増えたようである意味、気が気ではないようだ。

「お前も少しは感付けての……鈍感ヤロウ〜」

こんな事は初めてな晃は恥ずかしくなりながら頭を押さえて表情を作り直す。とARRIAカンパニーに入っていた。

カイトの絵も変わったがどうやら人間関係も変化している．．．かもしれない。

さて話の続きはまた今度．．．。

# EXTRA STORY その優しき常緑樹に・・・

「・・・・・・・・・・？」

「起きた？お兄さん？」

「ラズリンティス・・・・・・・・ここは・・・君の世界か・・・・・・・・」

目が覚めると寝ていたのは前にラズリンティスと出会った彼女達、フロマのいる世界で彼女が解放されたことで青のモノだけが世界の所々を染める。

「これは・・・・・・・・？」

「新しいフロマがお兄さんの眼に干渉したんだよ・・・緑のフロマ」

「どうやらまた別のフロマと会う資格を得たようでこの世界に呼ばれたようだ。」

「あの時みたいに・・・・・・・・『眼』の力を使って・・・・・・・・」

『眼』を発動すると薄らとではあるが発光色の緑が見えてきた。そして恐

らくは森の木らしきシルエットのところから一人の少女がこちらを見ている。

「あの子かい、ラズリンティス？」

「うん」

ラズリンティスと手を繋いで緑のフロマに歩み寄ってその場でしゃがみ込む。

「初めまして、緑のフロマ。僕はカイト、この子はラズリンティス、君が

僕をここに呼んでくれたの?」

「……………」

だが言葉を発することなく、緑のフロマは突如として消えてしまった。

「あ…あれ?」

辺りを見回してみるがどこにも彼女の姿は無かった。ラズリンティスが説明する。

「緑のフロマはね、とつても恥ずかしがり屋なんだ。前のご主人様の時も

なかなか仲良くなれなくて…でも最後は仲良くなつたよ?」

「そうなんだ、とりあえずは根気よく話しかけるしかないか」

それから僕達は手を繋いで森林地帯であろう場所を歩いていく。

「?…なんだ、今、足に何か当たった気が?」

僕が足元を見てみると何かが薄らと見える。足…?人じゃない、これは

動物…?」

「!?!」

僕は気付いたその動物のようなものの周りにはあの色があつてそれらの状況

からこれは怪我をしているか、最悪の状況になっている動物と推測した。

「この目を使つてもはつきり分らない・・・生きてるのか、この子は？」

だが隣にいたラズリンティスが服をぎゅつと掴んで僕を引き寄せてくる。

「お兄さん・・・この子は光が無くなつてるよ・・・もう動かないよ」

「光が無い・・・？」

そして次第に目の解像度が上がったのか少し鮮明に見えてくる。そこにいたのは血を流し、すでに眼から光が消えている動物だった。

震えているラズリンティスを抱きしめて落ち着かせてその場を離れようとする。

「(!緑のフロマ・・・?)」

その動物の死体の横に緑のフロマが現れる。だが次の瞬間、動物の身体が光つて緑のフロマに吸い込まれていく。

「な・・・何が・・・？」

「・・・わたしに・・・近づかないで・・・あなたも・・・が消え——」  
言葉を最後まで言う前に彼女は消えてしまい、すぐにその場所に行ったが

緑のフロマの姿は見えない・・・だけど彼女がさつき言った言葉。

「(あなたも光が消え——)」

確かにそう言った。光が消えるつてどういう意味なんだ？

だが僕はそこで気付いたことがあった。さつきまで動物の死体があったと

「ここに一輪の花が咲いていた。

「これは……」

「あのフロマはね……とっても優しいんだ。でも自分の事をいちゃいけな  
い色だつて想つてる……他の光を奪つて生きているつて想つてるの」

「いちゃいけない色……他の光を奪う……?」

『光を奪う』『光が消える』この表現について少し考えてみた。死んでし

まっていた動物らしきモノから出た光は緑のフロマに吸収されているよう  
に見えたけどたぶん、彼女とラズリンティスが言っている『光』というの  
は生命の『命』の事で『命を奪う』『命が消える』そう言いたいんだろう。

「でもこの花……なんていうんだろう……さっきの動物とオーラが同

じ色をしている。というより何でいきなり花が……?」

そういつてその花に触れると自分の頭の中にイメージ映像が流れてくる。

さっきの動物の光が形を変えてこの花へと変化していく、その映像だった。

「この花から感じる波動……とても力強くて生命に満ち満ちている……

あの子の色も少し混ざつてる。あの子の力……なんだよな」

その一輪の花を摘み取るとラズリンティスの頭に髪飾りとしてつけてみた。

「お兄さん、似合つてる……?」

「うん、とても似合ってる。それに君の色がもつと綺麗になった気がするよ」

彼女の色のオーラが前よりさらに純度を増したような気がしたのだがそれは彼女も感じたようで頭の花飾りに触れるとても嬉しそうな顔になる。

「流れてくるよ、緑のフロマの優しいあつたかさ・・・頭、撫でてくれてるよ」

もしかすると彼女は光を奪ってしまふことばかりを気にして自分が別の光を生み出している事に気が付いていないのかもしれない。

ここで僕は彼女の原色となる『緑』の意味について考えてみる事にした。

「緑の意味？」

「うん、緑はね、『成長』『安全』って意味があつたり、後は国の名誉や象徴を

表す色でもあるんだ。後はね、緑は春を表す色とも言われてるよ」

「春？草や木、お花がいっぱいになる？」

「そうだよ。後は緑の事を実はある国では青って一緒の意味に言い換えたりするんだ」

「緑のフロマと一緒？」

「文化的なものもあるんだけど青々としたっていう言い方もあるんだ」

ラズリンティスと手を繋ぎながら緑に由来する事項や知識などを話して聞かせる。今迄知らなかった事に彼女は眼を輝かせながら話を聞いていた。

「たぶんだけど緑のフロマは自分が消えそうな光をまたもう一度、この世界で



光り輝ける存在にしているのが分からないだと思ふ。自分が光を奪つて犠牲の中で生き続けているのを自分がいらぬ色なんて表現したんだよ」

「緑のフロマも一緒にいれるよね？お話出来るよね？」

「ああ、もちろん。．．．そろそろ出ておいで、ちよつとお話しよう」  
「？」

振り返つた先にいたのは木の後ろに隠れてこちらを見ていた緑のフロマだった。

そんな彼女にラズリンティスが歩み寄つて手を差出した。

「お話しよ、お兄さんからいっばいお話ししてもらつたんだ」

「．．．．．でも」

「わたしは光を奪うから、かな？」

「．．．．．(コクコク)」

木に隠れながら俯く彼女の頭に触れる。だけれど今度は逃げずにそのままだ。

だが彼女は悲しそうな目で言葉を発する。

「．．．わたし．．．何も生まない．．．光を奪つて．．．それで生き続ける冷たい存在」

そんな彼女にラズリンティスの頭に付けたさっきの花を見せる。

「見てみて、ラズリンティスの頭につけている花はね、君が生まれ変わらせた

さっきの動物の光。とても綺麗な花に生まれ変わらせたんだ、君が」

「・・・綺麗」

するとラズリンティスが自分の頭からその髪飾りを取ると緑のフロマの頭にそつとつけてあげた。その髪飾りに触れて足元の水たまりに自分の顔を映す。

「君は奪う存在じゃないよ。存在出来なくなってしまうた光を君はまた別の生きる光にしてくれている・・・君はとても優しく暖かい色だよ」

優しく頭を撫でながら微笑みかける。彼女はずつと花飾りを見つめている。

「お兄さん、お兄さん、緑のフロマにもお名前あげて、わたしみたいに」

「名前・・・？」

「うん、いいよ。そうだな・・・」

僕は緑の色の名称を頭に浮かべていいものがないかと思案する。僕が思いついたのは古代ギリシャにおいて神の霊木として知られている常緑樹の1つである月桂樹を表し神聖視されている名前『ロリエ』だった。

「それじゃ君の名前は『ロリエ』。永遠不滅を表す色、消えゆく光をまたこの世界で永遠に輝かせる命を繋ぐ色・・・どうかな？」

「ロリエ・・・わたしの名前・・・」

すると彼女の身体が光輝いて伸ばしてきた手を僕はとる。それと同時に『眼』の力が発動して今まで不鮮明だった発光色の緑が青々とその色を表して周りに森が

生まれ、そこには動物達、植物達が生き生きしている。

「感じる・・・わたしの中にあつた光が・・・世界に溢れてる・・・みんな、生まれ変わって行く・・・また新しい光に」

ロリエもラズリンティスと瓜二つの外観となつて2人がしつかりと手を繋ぎあつて額をつけると嬉しそうな笑みを浮べてお互いに喜び合つた。

「ラズリンティス・・・お話・・・聞きたい」

「うん、いっぱいお話してあげるね」

2人はその場に座るとラズリンティスが僕に今まで教えられた話をロリエに話してあげていた。その話をとてもワクワクした顔で聞き入っていた。

「よかった・・・緑のプロマも色を取り戻してくれた。ふっふ、いい笑顔だね」  
(・・・う)

僕はその時、何かの声を聞いてふと辺りを見た。だがそこはさつきまでの森の中ではなく、周りは数々の絵に囲まれた通路で奥に続いていた。

僕は誘われるようにその通路をずっと歩いていく、そして気付いたのは飾られている絵の形式が形式としては最古と言われる技法で今は失われているモノだった。失われているというのは再現する植物などもなく、再現出来ないという意味。

「(ハハ)は・・・」

開けた場所に出てそこには画材や古い資料、さらには包装布に包まれた絵もきちんと棚にしまわれている。そして中央に天窓からの光で照らされている一枚の絵を見つけてその絵に歩み寄ると僕は息を呑んだ。

「凄い・・・こんな技法見た事もない・・・本当にここにいたみたいだ・・・」

その絵には1人の女性が描かれていた。陶磁器のような肌と煌びやかな光を湛えて透明感のあるホワイトシルバーの髪、そしてどこか聖母のような笑みを浮かべた女性が描かれていて僕が見たどの絵よりもずば抜けたモノだった。

「なんて綺麗で惹きこまれる絵なんだ・・・」

僕がその絵に触れた瞬間、また光に包まれて目を開けた時に映った光景は水の上

なんだろうけれどなんと表現したらいいのか、幻想的な色彩に包まれた空間に透明度の高い水がその色を映して幻想的かつどこか悲哀的な雰囲気だった。

「なんだろう……この胸を掴む様な悲しき……すごく痛む……」

「やつと……会えたね」

「！」

振り返った先にいたのはさつき絵の描かれていた女性で実際にその人物が目の前に現れてその可憐であり、端麗であり、清廉さがあり、僕は啞然とする。

「き……君は……」

「あの子達の前の主人……あの子達から世界を消してしまった咎人」

「世界を消した……？ どういう事なんだ」

「わたしの一族は色により創り、世界を創生する力を持っていた。世界を色で視て全てを総べていた人間……いえ、あの頃の一族は自分を神と想っていたのかも知れない……それが大きな過ちであるとも気付かず」

『世界を創生する力』というのは何となくだけ僕はこの『眼』の力なんではないかと思つた。この『眼』はラズリンティス達の世界に色を与えて確かに彼女達の世界を『創つた』……だけ僕にもまだ理解出来ないレベルではある。

「そして怒りをかい、わたし達は色を奪われ、世界を創るどころか世界を視る事

すらも出来なくなり・・・最後・・・存在が消えた」

「色を奪われた・・・？もしかしてラズリンティス達の世界が白に塗りつぶされていたのはそのせいなのか」

「ラズリンティス・・・？青のフロマの事ね・・・あの子は元気にしているの？」

「あ・・・ああ、元気にしてる。それにロリエ・・・えっと君には緑のフロマってい  
えばいいかな、彼女もさつき打ち解ける事が出来たんだ」

「あの子が・・・わたしの時は仲良くなるまで時間が掛ったけれど・・・あなた  
は本当の意味で『創生の力』を使われるべき道に使ってくれているね」

「『創生の力』っていうのはこの『眼』の事・・・でいいんだよね？」

「ええ。でもまだその『眼』の力は戻ってはいないの・・・その『眼』はまだ色  
を『理解する力』、色を『生む力』だけまだ他にも力は眠っている」

そういつて彼女が近づいてくると僕の頬に手を添えて背伸びをしてくると額に口  
づけをしてくる。僕はいきなりの事にまったく反応が出来なかった。

「わたしに残った力ではそれくらいしか出来ないけれどあなたの『眼』にもう一  
つの力・・・『色を具現化する力』を与えたわ・・・じきに必要になる」

「君は・・・一体・・・？」

すると少し柔らかな笑みを浮かべて彼女は名乗った。

「わたしはイオン・ कोरोレ。『永遠なる色』、総てのフロマと通わせる事が出来た・・・『創生の姫君』と呼ばれていました」

「 कोरोレ？ 僕と同じラストネームだ」

「わたしと同じ？ あなたの名前を聞かせてもらってもいいですか？」

「僕の名前はカイト・ F・ कोरोレと言います。君と同じラストネームなんだ」

「わたしの世界で『 कोरोレ』の名を持つモノは『創生の力』を持つ者の中でも最も神聖視された存在・・・わたしの一族だけが継いでいる名です」

「それとどういう・・・なっ・・・！」

しばらくすると周りの色がどんどん白に塗りつぶされていく。イオンの姿もみえなくなっていく。最後に彼女が必死に訴えかける。

「あなたは・・・忘れないで！ 『創生の力』の意味を、今のあなたでいつづけて！」「ちよつと待ってくれ！ まだ話したいこ——」

そこで僕の意識は途切れた。

・  
・  
・  
・

「……………ん——さ——ん——い——さ——!——おに——ん——!——

お兄さん!」

「……………っ」

僕が目覚ますと目の前には心配そうに僕を見つめている。

「大丈夫……? 大丈夫……?」

ロリエが泣きそうな顔で僕を見上げてぎゅつと服を掴んでくる。どうやらかなり心配させてしまったらしい、安心させるようにそつと抱き寄せた。

「大丈夫だよ、ロリエ。心配させてごめんね」

「わたしも心配したよ、すつごく心配したよ……!」

「うん、ありがとう。ラズリンティスも心配かけてごめんね、もう大丈夫だよ」

「♪」

抱き寄せた2人は途端に嬉しそうな顔になって笑みを浮かべている。僕はほつとしたのだが頭に浮かんだのはさっきの少女『イオン』の事だった。

僕と同じ『 कोरोレ』のラストネーム……そして彼女の一族と世界では神聖視

され特別な意味を持っている言葉……僕がこの力を受け取った事も関係があるのか。

「あつ……お兄さん、そろそろお別れだよ?」

「お別れ……」



ちよつときびしそうに顔を俯かせるロリエの頭を撫でながら言った。

「お別れつて言つても『眼』を使えばいつでもお話出来るし、またお話しようね？」  
「・・・！うん♪」

よかつた、笑つてくれた。そんな安心感と共に僕はまた意識を失つていった。

「『カイト・F・コロレ・・・わたしと同じ『コロレ』の名を継ぐ男の子」

わたしはいつもと変わらないこの鎖された空間で長い年月の間会う事もなかつた別の人との出会いについて想いに耽つていた。

それに彼との接触の後にこの空間には『あるモノ』が落ちていたの。

「とても綺麗・・・それに温かい絵・・・これが彼の絵・・・まだ未熟な力だというのに『眼』の力をとても引き出せている・・・不思議だね」

まだ彼の『創生の力』はわたしには満たないモノだけれどこの絵にかけている想いは一族や他の力を持つ者達でも出来ない、とても優しく、穏やかで心を溶かすような別の力を感じさせるオーラに満ちてわたしの心もすつと満たしていく。

「これが彼が視て描いた世界・・・もつと見てみたい・・・彼の絵を・・・」

そんなわたしの願いを聞いてくれたのかその絵画帳には彼の絵が浮かび上がっていき、わたしはその絵をずっと眺めていた。

彼ならあの子達の世界を取り戻してくれる・・・どこか確信めいたモノがわたしの中には浮んでいた。わたしにも出来なかつた『世界の創生』を。

そしてわたしはその絵画帳をしつかりと抱いてまた・・・眠りに・・・。